

有への道



関根久子 著

「目次」

第一章	癸病	五頁
第二章	家は水害に	六頁
第三章	退院	八頁
第四章	アンチヤンが、上海に行く	十頁
第五章	足の病気の再発	十一頁
第六章	済生会病院より退院	十五頁
第七章	ねずみさん私をどこかへ	十七頁
第八章	突然、兄の帰国	十八頁
第九章	敵の飛行機が火を噴いて	二十頁
第十章	おもち	二十二頁
第十一章	お前さんは、姉妹の厄介もんだね	二十四頁
第十二章	兄の戦死	二十六頁
第十三章	またまた、病気にとり付かれて	二十七頁
第十四章	二人で居ても一杯の、水も汲めず	二十八頁
第十五章	兄の生まれかわりの男の子	二十九頁
第十六章	父が私に化粧品を買ってくれる	三十頁
第十七章	姉が洋裁学校へ	三十一頁
第十八章	弟の爲に、造ったお人形が、	三十二頁
第十九章	姉がオーバーを裁ち間違えて	三十三頁
第二十章	私も年頃に	三十五頁
第二十一章	なせば成る	三十七頁
第二十二章	姉の結婚	三十九頁
第二十三章	天理教へ	四十一頁
第二十四章	四十二才になると良い人が、 現れる、との予言者のお告げ	四十二頁
第二十五章	お医者様が、一言「奇跡だ」	四十四頁
第二十六章	私の小さな仕事場が出来た	四十七頁
第二十七章	仕事ひとすじ	四十九頁

第二十八章	妹良子の結婚	……………	五十一頁
第二十九章	自信と、うぬぼれ	……………	五十二頁
第三十章	榎佐子の結婚	……………	五十三頁
第三十一章	自動車免許―取得	……………	五十四頁
第三十二章	障害者と共に	……………	五十七頁
第三十三章	私が、初めて仲人に	……………	六十頁
第三十四章	障害者にも、二種免許を	……………	六十一頁
第三十五章	また、仲人を	……………	六十三頁
第三十六章	二十年前の、予言どおりに	……………	六十四頁
第三十七章	労働大臣賞は、私のファイナーレ―	……………	六十九頁
第三十八章	私も、幸福になりました	……………	七十頁

第一章 「癸病」

それは昭和十六年、暑い夏の七月初めの事です。小学校四年生の一学期は、もう少しで終わる学校の帰り道、前から少し痛かった左足が痛み出し友達に助けられ家に帰りました。

その日から高熱と足の痛みに、父や母は、お医者様を呼んだり、接骨院に連れて行ってくれましたが一向に直らず、近所の人に教えられて、田んぼにいるヒルンボを漢方薬屋で買って来て、血を吸わせると好いと聞いてやって見たりして、良いと言う事は何でもして見ましたが何をやっても治らずトイレにも行けなくなりました、そのうち寝ている天井がぐるぐるエスカレーターのように廻りだしたのです。

「かあちゃん天井がぐるぐる廻っているよ」と熱に浮かされて言い始めました。父は心配して、医療相談所へ行ったそうです、そこで始めて、

骨膜炎ではないかと 教えられたそうです、

父は其の事を母に話し、これから久子を教えられた赤羽の病院へ連れて行く 聞いた母もビックリ急いで入院の支度をして車を呼び

父は熱に浮かされて居る 私を、毛布に包み、すぐに来た車に乗り、隣町の赤羽の平田病院へお願いします、と運転手に頼みました 車は、盲腸専門の平田病院へと着いた。

赤羽には、もう一軒、整形外科の善い病院が、あったのでしたのです。「久子の人生にかかわる大きな運命のいたずらでした。」

車は盲腸専門の外科の平田病院へと着いた。すぐに診察を受けました、赤く腫れている左足から、注射で吸い取るはずの血は、一滴も出さず

太股から吸いだされる注射器には黄色い「うみ」ばかりでした、

レントゲンも撮らず、すぐその夜、手術台に乗せられました。忘れもしない昭和十六年七月十日、久子十歳の時でした、

父に手術を立ち会ってくれと、お医者に言われたそうです、

父は正気では娘の足の手術を見られないと表に出てお酒を飲んできて私と手術室に入ったそうですが、： ガタガタとふるえてお酒の効き目をぞ

なかつたそうです、左太ももを二十センチぐらい切り裂きました、まだその時骨まで腐つてはいないので、病名は「骨膜炎」でした。

全身麻酔でしたのでの手術は覚えなく終わりましたが手術後の足の痛みと四十度の高熱との戦いでした。系では縫えず、切りつばなして、黄色い薬の付いたガーゼが手ぬぐい一本分くらい入りました。

その夜は父が付き添ってくれ、翌日から母が小さい二歳の妹、楨佐子を連れて来て私の看護をしてくれました、毎日の回診にガーゼを入れ替えの時の痛さに、母の手にかじり付いて、病院中に聞こえる様な大きな声で泣き叫ぶのでした、

「今あの子の回診中」だと他の部屋の患者さんは自分の一番を待つて居たそうです。

家には機械工場に勤める父と、日本大学に行つて兄、当時十七歳の兄は、旧制中学校にも行かず、尋常高等小学校を、卒業して、すぐに日大の機械科の夜学に入学、頭の良い兄で、高等科を卒業の時、全校を代表して答辞を読んだ程自慢の兄でした、

大学に行つても、先生の代講をした事もあつたと聞いています。

顔立ちも良く、背の高い兄でした、昭和二十年の敗戦の年、戦病死してしまいました。その兄が、日記に「何時も元氣な妹が、足が痛い痛いと言っていて、可哀そうでみていられない、一日も早く治つて元氣になつてほしい」と書いてありました。

二歳上の姉もその時小学六年生やはりクラスで一番の成績でした。

この父、兄、姉、の三人が、私の病院生活の為、母の居ない家で仕事に学校に行き家を守つてくれましたその時兄は昼間、会社に事務員として働き

大学は夜間でした、兄の名前は光雄、私は「あんちゃん」と呼んでいました、あんちゃんは、ちよいちよい病院に色々と運んで持つて来てくれました。

はつ江姉さんは家で食事の支度母は其の時、お腹に赤ちゃんがいました、大きなお腹をした母は小さな妹「楨佐子」を連れての病院生活は、大変でした。

第二章 「家は、大水害に」

翌月の八月「昭和十六年」関東地方に又とない、大雨が降り続きました、特に地盤の低い川口です、芝川の近くあって、キユボラの町、映画でおなじみ工場で使う砂や、コークスなど川から運ぶ船着き場の近くでした。

長雨に堤防が決壊して、家が水浸しに、なげしに掛けてある 額のところまで水がかりました、たんすと、布団は、近所の二階屋に、預かってもらったので助かりましたが、全部家財道具は流されました、二斗樽に漬けたばかりの梅も、ぬかみそも、鍋、釜も、何もかも失ったのでした。

三人は母の実家にお世話になりました、大水害の後片付けは、それは無残で目を覆うばかりで床や床の間にも汚物が、いっぱいだったそうです、

母も私のことを、人に頼んで、駆けつけましたが、この時の 父と母は、どんな思いだったでしょうか、娘の私が、大手術をして 大変な時にまたまた大水害に遭って、 きつと、その場に 呆然と立ち尽くし、途方に暮れた事でしょう。

でも母は、そんな話は私に聞かせず又病院での看護、手術して食欲のない私の為に近いの、お寿司屋さんに話を話して、お寿司を買って食べさせてくれました、その頃から物が思う様に買えない時代でした、パンも、行列して買って来て貰ったのでした、

家では父、兄、姉、の三人は、何時までも母の実家お世話にもなれず、と言っても、大水害の後の家にはもう、直しても住めないのです、

光雄兄さんがとりあえずと、探した家に引越す事になりました、「とりあえずと言っていた青木町の家は六十年以上中島家がお世話になりました。」

其の為、母の手が煮くでは困るので、私より二歳しか年上でない、はつ江姉さんが、付き添い看護に来てくれました、姉は学校が夏休みでした六年生になったばかりの姉は、私の食事の世話から体を拭いたり 下の、世話まで、大変だったと思います、

姉は同じ病院で看護して居る人に、教えてもらった、ジャガイモの、
くずあんかけ、なる物を煮て私に食べさせてくれました、甘くてトロットくずの
掛かった白煮のジャガイモ、いつも、母が煮てくれるのと一味ちがう味、

「ねーちゃん とても美味しいよ」と言うと一緒に食べている姉は、

「美味しいでしょう」と誇らしげに言う姉は私と二つきり違わない年と思わな
い程、頼りになりました。

姉は二学期が始まると、又母と変わりました、

足の痛みは治まりましたが、ベットから下に下りられませんでしたが、足はまるで
鉛のように重くて立っていられませんでしたが

兄が探してきた、家に又父と兄、姉の三人の生活が始まりました

今度越した青木町の家は、畑と田んぼの中で、二軒長屋が、四棟建っています
た。

今までの家より狭く六畳と四畳半、建てて二年目のきれいな家でした。

姉は学校が二倍も遠くなり、兄も、父も、会社と駅が遠くなったのですが三人
協力して頑張ったそうです。

第三章 「退院」

母のお腹も産み月も近くなり、私の足の傷もふさがり、九月末日。退院する事になりました、家の都合もあり、院長先生も仕方なく、退院を許してくれたのでした、

帰る時、院長先生の言葉が、気に掛かることを言いました、

「この病気は一度では、なかなか 済まないで二度、三度、と再発するかも、」

何の気なしに聞いたその言葉が、久子の此れからの、人生の重大な予言だったのでした。

退院はやはりうれしい、帰る家は、私の知らない新しい家だ、家族がやっと、一緒になれる嬉しさ。もちろん家を守っていた三人のも、同じ思いだったでしょう。

車から父に抱きかかえられて、家に入りました。東の窓から見える

景色は、見渡す限り 畑と田んぼ、何軒かの家が遠くに見えるだけ。

小さな妹、榎佐子も嬉しそう、その夜は、久し振りで家族揃っての夕食の楽しかった事、やっと我が家に笑いが、戻ったのでした。

久子の足の手術、そして大水害と、父や母、家族は何か月も、夢中で過ごした、辛い出来事の日々でした、

ここで、父と母を紹介します。父の名は、中島源吉 機械工員として

工場に勤めています、その時三十八歳、(明治三十七年六月二十日生まれ) 真面目な父、腕の良い職人、人柄は、優しく思いやりのある父、東京生まれで、言葉使いが良く、品も備えています。

母、中島安久子、その時三十四歳(明治四十一年四月一日生まれ)

ほんほんと言うが、心温かく、気前のよい、下町風の母です、

私は、この父と母によって、重度の足の障害にも、ひがまず、卑屈にもならず、生きてこられたのは、父や母の、真面目で人の良い、そして暖かい家族の中で大切にされたからだと思います、

あくる月、十月二十六日、妹の良子が生まれました、女の姉妹が多いので、もう一人、男の子が欲しいと言う願いをこめて女の子はもう「良し」

ど、として、良子と、名づけたのでした、その姉妹達が久子の手足に、なつてくれたのでした、

久子の足も寝たり、起きたりながら、少しづつ家の中ぐらいは歩ける様になりました、

その年の昭和十六年十二月八日、大東亜戦争が、始まったのです。

日本の国が騒がしくなり、物がだんだん手に入らなくなる、生活になつたのでした、

そして日本が、勝った、勝ったと、喜んで、提灯行列や、旗行列で、祝っていたのでした。

十七年四月、小学六年を卒業した姉は、母方の叔母の所へ行く事になりました。田端に住んで居るので、田端の叔母さんと呼んでおりました、国技館で、売店をしており、子供が居ないので、後に姉が、養女にと言う話あり、叔母の家に行きました。

兄も大学四年になりました、私の足も良くなつたとは言え、遠くなった学校へ行ける程歩けるわけではなく、家に居て一年がたつてしまいました、その時は、横座りぐらいなら座れる様になりました。

第四章 「アンチヤンが、上海に行く」

日本は、つぎつぎと外国を占領して勝利に、勝利と続き、国内は、喜びで沸きたつていましたが、一八年の春、兄は、大学を卒業すると、日本が占領した上海に行く事になりました。

上海にある「華中鉄道」と言う会社で大学の機械科を、卒業した者の中から、五人採用するのに、七百人の人が応募試験を受けたのだそうです。まさか兄は、受からないと思ひ、父や母に、内緒で試験を、受けて見ました、ところが、受かつてしまったのでした。

兄は、父と母に、上海へ行かせてくれと、頼みましたが、

父は、大変に怒つて「男の子一人なのに、戦争している外国などに、やれるものか、」と言つて聞きませんでした、父の怒り母の嘆きはもつともな事だと思ひました、

でも兄は、「試験が受かったから行くのではない、前から、外国に行きたかった。日本は狭い、外国に行つて自分の、腕を磨き日本の為働きたい、父さん、母さん僕を行かせて下さい、上海は隣の国なんだよ、

何時でも帰つて来られるから、」と、父と、母を説き伏せました、母も私達も泣くばかりでした。

しぶしぶ、父も承知して、三月の卒業式を待たず、一月の末兄は、上海へ、旅立ちました。長い学生マントを着た兄の後ろ姿を何時までも、見送つた事を、覚えております。

待つていた、上海からの、兄の手紙が、届きました、

丘の上の西洋館の家に一緒に行つた五人で、生活して、支那の、メードさんが、食事や、掃除をしてくれ、不自由は無く

仕事は、設計や、色々な仕事を教える事だそうです。日本の、技術者と、いう立場なので、待遇が良いのでしせう。

第五章 「足の病気の、再発」

兄が上海に行く前から、少し足の具合が悪かった、又足が痛みだしたのでした、今度は川口市内にある、済生会病院に、診察に行ったら、再発との事、手術しなくては、駄目とお医者様の話に、体が凍る様な恐怖に震えました、

「もう嫌、あんな辛い事を、いつそ死んだほうが、いい」とさえ思いました。

父も母もつらかった事でしよう、昭和一六年七月に、初めての、手術、十八年二月、再発、二度目の手術台に乗せられました。

今度は、前に切った所を、もう一度切り、その上のももの付け根の所を大きくえぐり取ると、切り口を大きく開き、大工さんが使うノミと、トンカチの様な道具で、木を削る様に、腐った骨を削り取ったのでした、今度は骨まで腐っていたのでした。

手術は、局部麻酔でした。手足をバンドで、押さえられ、目隠しされた私は、泣き叫びました、そしてあらん限りの声で、「もうやめろ、痛えじゃあねえか、先生のバカヤロウ」と、どなりつづけました、

田舎育ち丸だしの、言葉で、悪態もくたい叫びつづけました。

軍医だった先生は慣れたもので、ときどき「いい声だねえーもうじきだ、もうじきだ、」と、なだめると、また私が、「うそばかり言っておわんねーじゃあねーか先生のうそつき」と泣きわめくのでした、

ともかく、長い長い手術の時間でした、六時間かかりました、

そして又二度目の病院生活が始まったのでした。妹の良子は、一才半、頭の毛のうすい子で、さといもちゃんと呼べれ、病院の、人気者でした、四才の妹の植佐子は、母の実家に預かって、もらい、家は、

父一人でした、私の為に、又バラバラの、生活になりました。

おばあちゃんに、見てもらっている植佐子は、母恋しさに元気がなくなり、体の具合まで悪くしてしまいました、その頃の、済生会病院は、

田んぼの中になりました、父は毎日、工場の帰りに寄ってくれました、

夕方になると、廊下に聞こえる父の足音をベッドの上で聞き耳を立てて待っていました。

病室には、ベッドが二つ有る部屋を借りきり、母と小さな妹良子が、寝起きしていました。

その頃の病院は、自炊も許されていたのでした。

母は小さな入れ物で、お新香の漬物まで作りました、夕食は父も一緒に病室での、家族のひと時のだんらんでした、夕食が終わると父は、

疲れた身体で、誰も居ない、家に帰るのでした、

父は、日頃の疲れで、ひどい風邪を引き、家で一人寝てしまった時、父の父、私にとって祖父が、日曜日だからと、家を探ねたところ、声を

かけても、返事もないので、病院の方へ来ました。

其の時、父は高熱に魘される様に、家で寝ていたそうですが、玄関に誰か来たのは知って居ても、起きられず、人の帰る足音を、聞いてたそうです。私の為に、植佐子にも寂しい思いをさせ、看護してくれる、

母も父も、皆それぞれ 大変だったと思います。

窓ぎわのベツトから外の景色が見えました、病院のすぐわきに、細い小道があり、私はベツトから、体を起こさず、大きな手鏡で、外を見て

は、楽しんだものでした、四月になった春の日、病院の小さな桜も私の目を、和ませてくれました。

新学期になったので、その小道を、学校に行く子供達がランドセルを

背負って、通るので、「いいなあ、あの子達は 私も学校に行きたい、もう、二年も学校に行っていない、皆は私の事など忘れてしまったのだろうか、赤羽の平田病院の時は、学校の先生も、友達も、お見舞いに来て くれたけど、」とさみしく一人そと泣いていました。

でも姉が、時々、田端の、叔母さんと、見舞ってくれたのでした、そんな時が一番嬉しい。姉は、お下げ髪でしたが、ずうっと、大人に見えました。

毎日午前中に先生の回診があります、何時も母の太い手を、ぎゅうと、力いっぱい、すがって、「痛い、痛い、」と泣き、皆に笑われるよと、言われると、口の中で うなるような、声を出すまいと、必死に堪えるのでした。

削った骨が、残っていると、言っては、ベッドに、大きな、

「のうばん」を、看護婦さんが、持つてくる時は、又先生が、足の傷を、かきまわすのです、そんな事が何度もあつたのですが、

どうも、もう一度手術をしないといけない、と言われ、三度目の手術室に入りました。前の時より少し、軽い手術でしたけれど、つらい、地獄のような毎日でした。

そんなある日、父が、ニコニコしながら「今日は、いいみやげがあるよ、」と一通の手紙をくれました、差出人は中島光雄、と書いて有りました、「アンチャンからだ、」と言いながら、すぐ手紙を読みました、

「チャコチャン、あんちゃんが、上海に来たあと又入院したんだってね、毎日痛い思いをしているんだね、きつと、良くなるから、頑張るんだよ、父さんから、知らせてもらったんだ、知らなくてごめんよ、チャコチャンの、足の事は、気にしてたんだ、痛いと言ってたから、顔を見に行きたいが、あんちゃんも、まだ、こちらに来て間がないし、御免よ、

父さんに、少しお金を送ったから、何か欲しいものでも買ってもらいな、又手紙書くから、」と、優しい兄の手紙でした。

兄は、自分が長男なのに、傍にいないで、父の手助けが、出来ないと思つたのか、それから、毎月二十五円ずつ送りつけて、くれたのです。

昭和十八年の二十五円は、働き始めたばかりの兄にしては大金だつたと思います。

隣の病室に、高橋利津子さんと言う人が、盲腸で、入院してきました利津子さんの、お母さんが、付き添いでした。私達は友達になり、家も、

青木町で、お互いの、家が近くである事が、分かりました。

利津子さんは、盲腸ですから早く退院になって、「青木町で会いませうね、」と言われ、帰られました、

付き添いをしていた、お母さんが、天理教の先生でした。

神様が、この先生に、会わせてくれた、最初の出会いです。

その頃、病院でも、「勘太郎月夜」と言う歌が、流行っていました。

そんな病院生活に根が生えた時、戦争はだんだんと、緊迫して、日本国土まで、敵が来る様になり、東京初の大空襲が、四月十八日にあつたのです。けたたましい、サイレンの音、まだ、内地の人にとって、

空襲の怖さを余り知らない時でした。

昼間からB29が、飛んで来たのでした。皆であれよ、あれよと

のんきに、それでも怖さも少しあつて、空を見上げていました。遠くで、

パンパンと、かすかに音がします、私も窓ぎわの、ベットから、大きな、手鏡を使つて、見ようとした事を覚えています。

夜になつても、続き、東京が空襲、爆撃に、見舞われてしまったのでした。

第六章 「済生会病院より退院」

私の足も、歩けないままですが、少しは良い方に向かっていたのと、家も心配になり自己退院して家に帰る事になりました、足からは、まだウミが出ていましたが、先生は、通院を条件に、退院しても良いと、許しが出ました。

世の中は、私の足どころではなく、戦争が激しくなり、食物も少なくなってきました。

でも、家の中は、又家族が、一諸に生活する様になり、上の妹、植佐子も、おばあちゃんの家から帰り元氣になり。下の妹、良子も、薄毛を床屋に行つて坊主にしてしまいました、女の子なのに、一寸可哀想、さといもちゃんと、言われていたのが、新ジャガさんになって、皆で大笑い、我が家は、平和な日が戻りました。

足は鉛のように重く、毎日傷の手当てが、自分の仕事でした、寝ている日が続き、右と左をかわる、がわる出して、歩ける家族の足を見ながら、羨ましく思い何で私だけこんな、不幸なんだろう、

「死んだ方がいい」と一人ポロポロ涙を流し泣くのでした、死にたい、死にたい、と、そんな事ばかり考える時もあり、又誰か来てくれないかなあ、美味しいおみやげ、持つて来てくれるといいなあ、とか、何時か必ず歩ける様になるとか、希望を持つ事もありました。

私ははつと、氣が付いた事があり：：死にたいとか、悲観して世の中が、真つ暗に、思える時は、必ず、壁か、タンスの方へ、向いて、寝ている時です、そして、わずかな、明るい希望を持つて氣分の良い時は、窓か、入り口の、方に顔を向けて寝ている時です。

それからの私は、なるだけ明るい方に、いきずまらない方へ向いて、寝ることにして、体の具合で、壁に向いて寝る時は、鏡で後ろを写して、入り口や、窓が、見える様に心がけました。

病気で寝ている人を見舞う時はよく、私の此の体験を、話をします。長い闘病生活の、一つの知恵です。

元気で居る人の心の持ちよう、にも考えられるかな、と、
……

第七章 「ねずみさん私をどこかへ」

昼間誰も居ない、部屋で、一人寝ていると、私が、歩けないのを、ねずみまでが、知っていて、天井のなげしの所から、首を、チヨコット、出して、私をじつと見ているのです、私もねずみの顔をじつと見ている。ねずみの顔ってなんと、可愛いのかと……毎日ねずみと、にらめっこ、顔を出さない時は、私は、心待ちするので、

何時かねずみと、すつかり、なじみになり、私が、小さい声で話し掛けると、ねずみは、首をチヨ、チヨ、と動かして逃げようと、しません。私が歩けない事、知って居るのかと思うと、一寸悔しかったりして、

ねずみの顔を、じいっと、見ながら私は、夢みたいな、童話の世界に、入って仕舞うのです。「ねえ……ねずみさん私を、何処か、いいところへ連れてって、楽しい所へ連れてって、それとも幸福をくわえて来て、私にちょうだい、」などと、一人で、空想にひたり、ひと時の幸福な夢の世界で、遊ぶのでした。

又、本当の夢の中で、空を飛び、川も、ひとまたぎ、工場の屋根でも、お寺の屋根も、まるで、スーパーマンのように、飛ぶ夢を見た……

その頃はまだ、テレビも無い時ですから私が、スーパーマン第一号だった、と思います。

自分の行きたい所へ行つて、喜んでいると、フツ、と目が覚めた時の、寂しさは、今も忘れることはできません、

夢の中だけが、歩いて、自転車にも乗れて、お座りが出来て、何処へでも行けたのでした。

又、ある夢の中で、白衣の、医者や、看護婦と、長い包丁を持って、空を飛んで逃げる私を追いかけて来るのです、

逃げて、必死に逃げる私の、背中に、グサリと、包丁が刺さり、背中に、強烈な刺激、ギヤア、と、声出して、目が覚めた時は、

地獄から逃げられた思いで、ああ夢でよかったと、ほっとするのでした。

第八章 「突然、兄の帰国」

一九年春、楨佐子は、保育所に行くようになり、良子も三才になり、そして、八月の初めのある日、暑さと、日頃の、苦勞に体をこわした父、は六畳の部屋で、寝ていました、玄関に人が、そして大きな声……

……私は、夢かと思いました。「アンチヤンだ」と、あとは、言葉になりません、夏休みには、帰ると、手紙を、だしたそうですが手紙より先に、

兄が家に着いたのです、母も玄関にとんで出ました。皆な泣き笑い、家の中は急に賑やかに、具令の悪かった父にとって何よりの、薬で、嘘の様に、元気になり、その夜は、久し振りに、帰った兄と嬉しそうに父がビールを飲んで居る傍で母が嬉しそうな顔、其の時の、

光景は今も忘れられません。学生だった兄が、家で、初めてビールを飲むのを見て、大人になって別人のように感じました。

父と、母は尚のこと、立派になった、せがれを、頼もしく、嬉しく、思った事でしよう。

兄は、戦争も激しくなつたし、家族の事も、心配になり、夏休みを、利用して、帰って来たとの事、上海の土産話を、沢山聞かせてくれ、そして、家族が、空襲の時、入って身を守る様にと、言いながら、家のすぐ前に、大きな、防空壕を、造り「これで安心だ」と、言った、優しい兄の、最後の思い出でした。

一ヶ月近く、日本いました、八月末日に、家族の身を案じながら、上海に帰りました。

兄が造ってくれた防空壕は、戦争たけなわの時、昼夜なく近所の人と、一緒に入り、私は玄関から、ニメートルぐらいでも、家族に、負ぶさつて入りました。

はつ江姉さんも、空襲が激しくなつて、東京に居ては、危ないと言って、家に帰ってきて、その年の一九年十二月一七日、妹が、生まれ、名付け親は兄が、上海に帰る時「今度は男の子に決まって居るから、邦夫と付けて、」と兄が考えた男の子の名前で、女の子なので、

邦子と名付けました、七人家族になり、又賑やかになりました。父は、大宮の農家にさつま芋の買出しに行つて、帰り警察に捕まり、安く買い取られて、家で楽しみに待つ私達を、がっかりさせた事もあり、又母も買出しに行き、空襲に遭い見知らぬ農家に、とびこみ、命びろいをしたが、その農家で、米や、野菜を分けて、もらつて、帰つて、来られた事もありました。

大水害で家が、流されて、兄が、すぐに探してきた家、一寸の間と借りて、住んだ家は、六畳と四畳半、妹達がふざけて、私の寝ている布団の上に行つてくると、「痛い」と悲鳴をあげて、泣くのです、

食事の支度の母は大きな声で、「又チャコの上のつたの」と叱る。

母、めそめそと、泣く私、元気な妹達、御飯になると、お盆で、食事を、運んでくれた、姉や妹たち、私は家族の、暖かい思いやりに、包まれて、貧乏はしていても、心豊かに暮らしていました。

第九章 「敵の飛行機が、火を噴いて」

昭和二〇年の春、兄は上海で、現地召集されて、軍隊に入隊しました、家族の、見送りも無く、一枚の知らせを、家族に残して、入隊したのでした。

東京は空襲が激しく、川口も到る所に爆撃されました。

祖父も、「父の父」東京から我が家に、狭い家に、祖父、父母、姉、私、妹三人、八人家族になり、戦争はますます激しくなり、

そんな二十年三月十日の夜の空襲の時、祖父は、「もう防空壕に、入っても、命があるか、どうか、判らない」と、家に居て避難しないでいました、私も父も母も家族皆、死ぬ時は一緒に死んだ方が良いと、家の中に居ました、家族で、窓から、東京の、真っ赤な夜の空を、見ながら、

「東京は爆撃で、沢山の方が焼け出されてしまう」と、恐ろしく、人事でない思いでした。

其のとき、小さな、赤い玉が見え………「あれは、何だろう」と、言っているうちに、その玉は、こちらに飛んで来る「火の玉だ。」………

みるみるうちに、火の玉は、大きくなつて飛んで来るではありませんか、

真っ赤な火の塊が、夜空に恐ろしい速さで、ゴダーアんと、物凄い音と共に、夜空が真っ赤に染まり、一瞬昼間より明るくなり、「ああもう駄目だ、」とその時、誰もが思ったのですが。私の家から一キロ位離れた、所へ、アメリカの、飛行機が落ちたのでした。

焼けた飛行機の中で、アメリカの兵隊さんが、リングを銜えながら、

死んでいたと、見た人の話でした。今、そこは、川口オートレース場になっています。其のときは、原っぱだったので被害はなかったのが

幸いでした。生きた、心地のない毎日、日本本土が戦火に包まれたのです。

暑い夏の八月六日、広島に原子爆弾が落とされ。八月九日に、長崎に

又、原子爆弾を、落とされたのです。日本の国が、めっちゃめっちゃになった、

八月一五日、天皇陛下の、お言葉があり、終戦の知らせに、皆で、

「ああ良かった、」夜昼なく恐ろしい空襲がなくなるだけでも、幸福だと思えました。

そうだ、兄も、帰って来ると思った。その年の九月三日祖父は、急に、倒れて、そのまま帰らぬ人になったのだが。その数日後の九月十二日、兄が、戦病死しているとは、誰も想像できませんでした。

私の仕事は、トイレに、いざって行ける様になった事と、一日二回の足の傷の手当、うみのガーゼを取り替える事です、

夏など暑い時は、自分さえ気持ちが悪くなるほど臭いのでした。

父は傷に良いと言われる薬を、東京まで買いに行ってくれました。

第十章 「おもち」

母は、寝ている私に、初物の食べ物が出ると、私に直ぐ買って来て、くれるのでした。特に秋の青いミカンを買ってくれるのが楽しみで、今でも青いミカンを見ると、その頃の事が想い出されます。

寝ていると、食べる事が、一番楽しみでしたが、一つ嬉しくない食べ物があります、その頃は、年に一度しか食べられない、お餅です、

私も大好きでしたが、お餅を食べるとウミが、どつろと、濃くなり、足が、痛むのです、

母は、餅搗きの前に、好きな、おかずで、白い御飯をお腹いっぱい、食べさせて、くれるのです。

皆が、搗き立ての餅を美味しそうに、食べていても辛く無い様にと、の母の、思いやりでした。

でも、お正月中には、少しは、お餅も食べ御馳走も、食べると、足は、だんだんと、痛み出すのです。

その痛みは口に言い表す事もできません、身体中の神経が、足に集まってしまったかと思うように、一人で、涙がほほに流れるのです、

その痛みは一ヶ月位、続くのです、左の太股が、倍に、なつたかと、思うように、腫れて赤く色どり、咳や、くしゃみも、少しづつしないとい

大変です、

その腫れ物も熟しきると、「あつ」と、まるで足が爆発したかと思える様な痛みと共に傷口開き、缶詰のミルクを開けたように、黄色いドロドロのうみが出るのです。すると、あの、物凄い痛みも、

うすらぎ、だんだんと、楽になってくるのです。そんな痛い腫れ物の小さな傷が九個もあり。お医者様が、切ったり、えぐったり、した、

大きな傷が二箇所、私の左の足には全部で十一ヶ所の傷が、左ももの付け根から、膝までの間に、あります、世の中も戦争、私も、足との一五年の闘病生活でした。

寝ている私は、本を読む事は、楽しみの一つでした、子供の本でも、

大人の本でも、手当たりしだい、読むのでした、おみやげに、よく本を頂くと、大切に少しづつ読もうと、思っても、ついに一遍に読んで仕舞うのでした、

昭和二十年から、二十一年頃から、寝たり起きたりで、片足で、畳の上なら

歩ける様になりました、片足で歩けるか、り、歩けるのです、

けんけん飛びでわないので、右の良い足のつま先と、かかどを使って交互に出してすると、歩けるのです、この歩き方なら、痛い足に、負担は掛からないのです、

冬は、喘息で苦しみ、春は、両足全部おできが噴出し、死ぬような、

かゆさです、秋が来て寒くなるとかゆみは、治まりますが、今度は、

目が、しよぼしよぼと、なり、トラホームの様に目やにが、出るのです、

一年中、病氣と闘っている様なものでした。

親でも居なかつたら、私は、とおに死んで居た事でしように、

第十一章 「お前さんは、姉妹の厄介もんだね」

二〇年の秋、姉が養女に行っていた、母の叔母で、田端の叔母さんが、戦災で家を焼け出されて、三重県の、御主人の実家に、行く前、私の家に、「カ月位居ました。

子供はなく、おしゃれな叔母さんは、食べ物も贅沢な人なので、母は、物の無い中を、一生懸命食べ物を探して、お世話して居ました。家の者が、仕事や、学校に行った後、私は、叔母さんと、食事をしたり、色々お話を、聞かせて、もらうのでした。

そんな有る時、私の顔を、しげしげと見ながら言うのでした。

「お前さんは可哀想だね、足は包帯だらけ、学校も行けず、勉強も

教われないし、このまま足が歩けず直らないとしたら、大変だね、
気の毒

だねえ、親の居るうちは、いいが、親が居なくなったら、

姉妹の世話になるしかないもんね、お前さんは、姉妹の厄介者だねえ。」

と。慰めか、真実の話か知らないけれど、聞いて居る私も、

初めて自分の身の上に、ついて、話してくれる、言葉が、十四才の、
私の心の

奥底に染みとおる思いがしました。

そして、だんだん、大きく広がって、姉妹の厄介者、姉妹の厄介者、と、

その言葉が、私の耳に残ったのでした。この言葉がなかつたら、

今日の私が、なかつたと、思います。きっと、叔母さん自身の、

身の上と、私の身の上に置き換えて言ったのではないでしょうか。

でも、死ぬまで、私が皆の厄介にならないとは限りません、成らない

様に願うだけです、

敗戦の日本は戦争が終ってもまだ世の中が、落ち着きません。

戦争に行った兵隊さんは、あちこちで、帰った話を聞くようになりまし

た、「光雄兄さんも帰ってくる」と家中で帰って来るのを楽しみにしていました、

私も、のんびりと、毎日を母に甘えて、皆に世話になつてばかりいられないと、

少しづつ何かする様に心掛けました。

毛糸編み物を初めました、姉に編み物の本を買って来て貰い、一人で本を

見て考えながら、靴下や帽子、セーターと次々に編んで、姉や妹に着てもらい、手袋などは、近所でも評判が良く、編んで欲しいと、頼まれる様になりました。一日で、一組できました、自分で褒めるのも、おかしいですが、手袋の指のまたなどは本当に良く出来たと思えました。

姉に。白いレース系で、レース編みの手袋を編んで上げた事も有り、姉は、その手袋をして、サツソウと、銀行の、お勤めに行き皆さんに褒められたと言って、ました、父の仕事着や、足袋のつぎ、皆の直し物
と、手で出来る事は何でもやりました。

着物や、家の物が、食べ物に変わったのも其の頃でした。
竹の子生活と、言う、言葉が、流行ったものでした、妹達は、まだ、幼い、小学生で、毎日家に居て黙って母の苦勞を、見て居たので、一番私が、良く知っています。

一人手仕事をしながら、毎日兄の帰る足音を楽しみに、耳そばだてていました。

あの、夏休みに、帰った時の様に、兄が、突然「只今」と大きな声で、玄関に、立つのを、想像して待ってました、きつと、父も母も、兄の帰りを、首長くして待っていた事でせう。

第十二章 「兄が 戦死……」

そんなある日、二十一年の夏、兄の知人と言う人から、一通の手紙が届きました。「故・中島光雄君に預かった物と、」書いて、中に、手紙と、印鑑と、小さなふくろの様な物が、入っていました。

故とは、死んだ時に使う言葉です、そしてこの手紙には差し出し人の名前が、無いのです、何かの間違えであってほしいと、父は方々に、問い合わせても判りませんでした。

それから、三ヶ月位過ぎた秋のこと、市役所から本当の戦死の知らせに、兄の死を見ていない、家族にとって、信じられない思っていました。

二〇年、九月十二日に、戦病死していたのでした。二十一年、十一月に、一年以上たった、お葬式でした、兄の死は、父や母にとってどんなにか、悲しい事とおもいます。

頭の良い兄、家族思いの兄、大学まで行って、これからと言う時、

その時こそ私は兄と替わりたい私が、死んで兄に生きて居て欲しいと、運命の、いたずらに、一人で、泣き、神も、仏も無いものかと、心から

悲しみましたが、誰にも言えませんでした。

兄のお葬式も悲しみのなかで、終わりました。

もう兄の足音を待つ事は無くなりしましたが、もしやと耳を澄まして、足音を聞く癖は、なかなか、取れませんでした。

第十三章 「またまた 病気にとり付かれて」

翌二〇二年、私も十六才になりました、寝たり起きたり、つぼみの、娘ざかりに。またまた、病気が、とり付き、腎臓炎です、顔も、手足も、丸く、むくみ、目など開けているつもりでも、はれ塞がって、やっと見えるほどに、青ぶくれてしまいました。

お医者さんも見離し、後で聞いた話ですが、母が台所で泣いて居ると、近所の人は、「私が死んだ、」と思ったそうです。私も本当に、死にたかった、母に、「あたい、アンチヤンのところへ行きたい、」と泣き出しました。母も泣きながら、「何を馬鹿な事言って、」と私の涙を拭いてくれるのでした。

母は、私に塩けの無いチャガイモを、茹でたり腎臓に効くと言っては、干しとうもろこしを煮出して飲ませてくれました。又寝たきりの身になってしまった。私の、布団の下は、畳が茶色になってブヨブヨしてきたので、布団を数回場所を、昼間だけ変える事にしました。

父や母の温かい看護のお陰でお医者様に見放された腎臓も、だんだん良くなりました、私は思うのです、本当は兄が、私を可哀想に思って、

迎へに来たのでしよう、でも兄には今日の幸福を見抜いて、私を、連れて逝くのをやめて、私に生きる力を置いて行ってくれたのではないでしようか。

第十四章 「二人で居ても、一杯の、水も汲めず」

死にはぐれた身は、まだ足が鉛の様に重く傷から、うみが、出ていて、歩けないけれど、一人留守番をしていると、何時も遊びに来る、近くの、おばあさんが来ました、そのおばあさんは、悪性のおでぎで、痛くて、両手を肘まで包帯をしているのです、娘さんが毎日治療して、トイレの行く、後始末までしてくれて、優しい人なのです、足は、何ともないので、よく私の所へお喋りにきます。

何時の様におしゃべりに、はながさき、のどが渴いたのでお茶を沸かす事になり、その頃水は、外井戸で、家のすぐ前に井戸が有るのに、二人で、いても一杯の、水も汲めず、誰か通ったら汲んで貰おうと、寂しくおばあさんと顔を見合わせて、笑ったのでした、

母は、食べ物も、農家に、買出しに行く時、一日留守にする私の為には、お弁当を作って、やかんに湯冷ましを、枕元に置いて行ってくれるのでした。

一人で留守番をしていると、色々な事を考えるのです、

何で私ばかり病気になるのだろうか、何も要らないから丈夫な身体になりたい、歩きたい。私と同じ年頃の娘さんを、見るとまるで、自分が、

幼いままの、女の子に思えました、近所の人たちも、何か珍しい物や、美味しい物を下さる時は、小さな妹達の名を言わず、必ず私の名で、

「チャコちゃんに、」と言って持って来て下さるのです、

母も少し位の物は、「皆が、帰ってこない内に食べな、」と言って、枕元に持ってきてくれるのでした、お魚、肉など中々手に入らない時でしたから、配給で買えた時など、母は、自分の分は、食べず私に食べさせてくれるのでした、母の丹精も空しく、私はガリガリに、痩せて、

「骨皮筋衛門」でした、食べても、食べても足から、「うみ」になって出てしまうからでした。

第十五章 「兄の生まれかわりの男の子」

翌年二十三年三月五日、兄の外に、男の子が、居なくて、又、女の子だろうと、あきらめて、居た我が家に、喜びの、男の子の産声、あの時の事は、今も忘れられません、その頃は家でお産をしたのです、お産婆さんが、大きな声で「男の子ですよ、おちんちん付いてますよ、」と言うと、父は、大喜び、家中が、真夜中なのに、ワアツと、大きな声で歓声を上げたのでした、あとで、中島さんの家は何事があったかと、驚いたと、言われました。

兄の生まれ代わりでしょうか、死んだ兄の名前は、光雄、その雄の字を、上に付け、雄司と、名付けられました、

母は、十人の子供を、生んだのでした、最初に男の子、中、八人は、女の子最後に男の子家族は、又八人となり、またまた、賑やかにになりました。

父は、一生懸命働きました。母も園や、を、やったり、川口の特産の、鍋や、やかん、など、田舎に持って行って食べ物と、交換したり、

して、大家族を育ててくれました。

第十六章 「父が、私に、化粧品を買ってくれる」

そろそろ年頃になった私に父は給料日、近くになると、「何が欲しいか、書いておきな」と言うのです、私の為に化粧品を買って来てくれるのです、私が、「口紅と、ほほ紅、」書いておくと、給料日の帰りに、

買って来てくれるのです、「お父さん、女の、化粧品なんか買うの恥ずかしくない、」と聞くと「何も恥ずかしい事は無いよ」とけろりと言うのです。

寝たり起きたりの、生活でも、やはり年頃十七、八の娘です、

化粧して見たい時は、口紅や、ほほ紅をつけて、鏡にうつし、一人、

うきうきする事もありました。そして、片足歩きで家の中を歩くのです、

私が外に出られる様になるまで、父は、私に、化粧品を買って来てくれました。姉にも頼まず、私を喜ばそうとしての、父の思いやりでせう。

第十七章 「姉が洋裁学校へ」

姉は、会社に行きながら夜、洋裁学校へ行く様になりました。

姉が学んで来た帳面を見せてもらったのが、私の楽しみでした。

又婦人雑誌の付録に、文化服装学院、町田菊之助先生の、書いた、

家庭で習える洋裁の、実際独習書の本を、全部、頭の中に、入れようと、

毎日、毎日、くり返し読みました。

今もその本は、私の宝としてしまつてあります。

子供服、婦人服とその薄い付録の中には、ほとんどの基礎が書いてありました。

私の心に夢の様な希望がわいてきました。何時か洋裁師になるんだ、

何時か、きつと成つて見たい、そしたら姉妹の厄介ものに、ならなくて、

清む、などと、気の遠く成る様な夢から、ふと覚めて、又洋裁の本を、

何度も読み返し、勉強するのでした。判らない所があると、姉に学校で、

聞いてきてもらつたりしました。

その内、姉に、宿題が出る様になりました。姉は、ミシンを、買いました。

父は、学校六年を、出て直ぐに、足袋屋に、奉公して、少しミシンの

経験が有るので、私に、片足でミシンを踏む事を教えてくれました。

父は、昔を思い出し、足袋の底などミシンで付ける方法を見せてくれました。

姉は会社が忙しい時など、宿題を私が、代わつて縫つてやる事も、

しばしば、でした。部分縫いなども、ほとんどで、私が縫つてしまいました。

本で覚え、姉から、教わり、足の、具合の良い日は、本を、手にしているか、針

を持つ日が多くなりました。姉は、宿題や、洋服を造る時など、姉は、私が傍

にいた方が安心出来る、何時も、手伝わされる様に

なり、洋裁学校の先生からは、「中島さんの、(旧姓)お月謝は、二人分

頂かなくてはねえ、」と冗談を言われるほどに、洋裁の仕事が好きになりました。

た。

第十八章 「弟のために造った、お人形さんが」

弟の雄司もだんだん可愛くなりました。私が毛糸でセータを編んだり、服を造って着せたりしました。赤ちゃんの時は、私と一緒に寝て、遊ばせておりましたが、ハイハイする様になると、子守りしきれなくなり、そこで、弟の胴に負ぶい紐で軽く縛り、玄関に落ちない様に、危なくなると、紐をそつと手元に引っぱって、弟を傍に引き寄せるのです。

男の子は、一人なので皆で可愛いがついていました、女の子の中の、男の子ですから、小さい時から女の子の、玩具が好きでした、私が、残り布を使って、抱き人形を作ってやりました。物の無い時、お人形さんは、

町では売っていません、近所の人も欲しがって作ってくれど、頼まりました。ところが、それが評判となり、私にも私にもと、大勢の人頼まれる事になりました、大きさは、子供が抱いて遊べる位、帽子の前つばは、

大きく、つばの周りに、針金を入れて頭の毛は残り毛糸、帽子から少し

のぞかせ、洋服は、女の子は、ブラウスにスカート、そしてスカートの下には、パンツまで穿かせて、男の子は、シャツに、ズボン、袴には、

蝶ネクタイ、顔は姉が、目、鼻、口、を書いて口紅を付け、頬紅を、ぬると、まつ毛の長い、バッチリとした、可愛い目のお人形にまるで、

魂が入った様に見えました。初めの人が五十円下さつたのが、いつか

それが、お人形作りの、料金になりました。材料は、各自、家の残り布と、中に入れる綿を持って来て頂くのでした。

沢山のお人形を作りました、今、思うと、一番の洋裁のお客さまは、お人形さんだつたのです。毛糸の手袋も、よく頼まれて編んであげました。料金は、一組、一五〇円也 毎日が忙しく手の休む暇も無くなり、ろくに歩けない身体なのに、楽しい事を見つける日日でした。

第十九章 「姉が、オーバーを、裁ち間違ひ」

洋裁学校三年の姉は、卒業制作に、大物と取り組む事になりました。ラクダの、上等の、オーバー地、何時も私が、居ないと缺に、自信がなくて、生地が切れない姉も、卒業制作は、私の手を借りずに、造りたいと、

私を遠ざけて、姉一人で裁ちはじめました。狭い家なので、私は台所にいました。その時、悲鳴に似た声で、「チャコ大変だよ、」と言って大きな声を上げているのです。何事かと、何時もの片足歩きで、座敷に行きました。むずかしいデザインでした、同じ物が二枚出来てしまったのです、一着分の、半分に当たる間違ひでした。姉は、ポロポロと、

涙を流して、泣き出してしまいました。その頃の値段でも、物凄く、

高い品物でした。「やっぱり、チャコちゃんに見てもらえば良かった、」と言う姉が、可哀想になりました。

すぐ同じ生地屋さんに行つて、訳を話し、同じ物を、買って来ました。

オーバーは、姉に教わりながら、私が、ほとんど、仕立ててしまいました。それが姉と、私の卒業制作になりました。素敵なオーバーは、姉が

ベレー帽などかぶつて、さつそうと着て、会社に通つて行きました。

後に、裁ち間違ひえたその布地は、姉が結婚して、生まれた子の、オーバーに、私が仕立てて三人の男の子が着ました。

家の中だけでも、片足歩きで少しは皆の、手伝いが出来るようになった

私は幸福でした。そして姉の手伝いが、私の仕事の始まりでした。

それからは、姉が着て行く洋服、髪の設定、妹、弟、の洋服、は、

もちろんの事、毛糸で、セーター、靴下、手袋と、暇なく、手を動かしていました。その頃は毛糸と言っても、本物はなく、真綿糸とか、くずの様な糸でした。

父と母は、満一寸の、雄司に、着せる服を、探していました。私は、「お父さんが持っている、ラクダの毛糸の下着で、雄司

のセーター上下が、出来る」と言う父と、母は、「では作ってくれる

か」と、頼まれました。私は弟の誕生日まで父の下着をはぎして、セーターと長パンツ、と、グリーンの、水玉の生地で、チヨッキ、一揃い造りました。男の子

一人の雄司の、1才の誕生日を、喜んでいました、母が、近くの、写真屋さんを頼み、私が、弟を、抱いて写真を撮りました。

第二十章 「私も、年頃に」

それは、暖かい、穏やかな陽ざしの、午後でした。玄関に私は下りました。玄関には、四斗樽が置いて有ります、中には、たくわん漬けが、入っていて、大きな石がのつているのです、樽の側まで片足で行き、

樽の縁を、つかまえて、ぴよこぴよこ、樽のまわりを、歩いていました、なにげなしに外を、見ました。表の細い通りが、三十メートル先たりに見えます。背広を来た若い男の人が、大通りの、方に歩いて行きます、

横顔の、素敵な、歩き方も、男性的に。その時突然、私の胸がどきん、どきん、どしてきました。顔が、あつくなる自分に気がつきました。

ただそれだけの、事ですが、今も私の心の奥に、大切にしまわれています。家から一歩も外に出なくても、私は少しずつ、大人になっていたのです。

そんな年頃になっても、家から外に出られない生活でした、いくつもある足の傷口から、うみが、出ている包帯は取れません、家にはお風呂が無いので、暖かい日は母が、たらいにお湯を入れて、身体を拭いてくれるのでした。町に、ラジウム温泉が在ります、一日温泉に入って、遊べる所、私の傷にも良いのではないかと、母は、お弁当を作り、家中で

ハイヤーに乗って行きました、一間を、借りきつて、父が私の身体を男風呂に連れて行き、洗ってくれるのです

育ちの遅い小さな私は、子供ぐらいにしか見えず、まして、太股いっぱい包帯帯しているの、

男風呂に入っても、誰も、とがめるどころか、父が私の身体を、しっかりと、こすって洗っているのを見て、「大変ですね、お子さん足が悪いのですか、」と声を掛けてくださる人さえいました。私も娘盛りの年なのに、そんなに恥ずかしいとも思わず、父に洗ってもらいました。

お風呂から出ると、母が作ってくれた、ませ御飯や、色々な、おかずで、父は、ビールを飲み、私達皆は、いっぱいに、ひろげた、ご馳走を、食べ、まるで遠くの、本当の温泉場へ、行った様でした。

私の身体は軽くなり、まるで、よろいを外した様にうきうきするのでし

た。

私は家の中にも、毎日が、忙しくなりました。

妹達の、学校に着て行く服や小物品、父の仕事着のつぎ当て、近所の人からも直し物や、子供さんの、ランニング、半パンツ、パジャマ、

女性の、アッパッパーと洋裁と名が付く物ではありませんが、人様の

喜んで下さる事が嬉しくて、それに好きなミシンが使えるのですから。

その頃の布地は、まだ質が悪く、水に浸すとつばって、バリバリになり、乾くと、よれよれの、ハイバー、とか、ベンベルグと言う物でした、

こんな事に、励んでいると、日ごとに足に、力が付き、びっこを、

ひいて少し歩ける様になり、杖を突いたり、皆の肩を借りれば、外にも

出られる様になったのは、二十才頃からでした。足の傷はまだ治らず

太股は、包帯で膝から、ももの付け根まで覆われていました。

第二十一章 「なせば成る……です」

ひまが有ると、洋裁の本を、いつも見て研究していた私です、其のうち洋裁の腕も、少し上がってきて、妹達のセーラー服や、

オーバーなど仕立てられる様になり。竹の子生活の中でもまだ、残っていた、父の、二重まわしで、姉のオーバーを仕立て。 仙台平の袴で、やはり、

姉の、ワンピースを作り、身体も、身体も寝る日が少なくなり、

私にも、人並みの希望がわいて、きました。もしかして、夢の様に思っていた、洋裁師に成れるかも知れない、そうなれば、田端の叔母さんに言われた、姉妹の背負い者に成らなくて、済むのだ。

「なせばなる、なさねばならぬ、なにごとも、ならぬは人のなさぬなりけり、」と誰の、言葉か、知らない私ですが、「やるぞ」と思う強い心が生まれました。

だんだん他所の人に頼まれる物が、良い品物になり、小学校へ行く男の子の服をセルの着物で本式の背広、襟も毛芯を使って、本仕立てに、

半ズボンも本仕立て、仕立て代は、いくら頂いたかは、忘れましたが、部品を、買って、男子物の赤本を買うと、仕立て賃はほとんど、残らなかつた事を、覚えています。

でも私は、お客さまから私の腕を磨く、材料を、頂けたと思いました。私に付いてくる、技術は私の財産ですから。

そして、大人のオーバーを、子供のオーバーに、だぶつく男のズボンで、スカートにとか、お客は直し物を、「ほどこいて来るから」とおっしゃるのを「いいえ私がほどこきますから、」と預かり、ほどこ事によって、

専門家の仕立て方を良く見て覚えるのでした。一着の服から、色々な事を知りました、同じ型でも仕立てる、人によって、違う事が判りました、

又既製服と、注文服との良し、あしも、判り、姉の、洋裁学校の、先生の教え方とも、変わっている事もありましたが、それぞれが、良い所もあって、 結局、洋服の仕立てる目的は、「一つである事でした。

新しい布地に、ホームスパンと言う厚地で、粗く紡いだ糸を麻袋の様な重い生地が出たのもその頃でした、そんな生地さえ、衣料切符「政府発

行」が無いと思う様に手に入らない時でした。
お金が稼げる様になつたとわ言え、この足でわ、思うように外に、出歩く事は出来ません。外に出掛ける時は、妹たちの肩につかまって出掛けるのでした、妹達の言う事には、「チャコちゃんとお出掛けると、のろくてかえって、くたびれちゃうよ」と言われるほどでした。

第二十二章 「姉の結婚……ミシンとお別れ」

昭和二十七年、十月八日、姉は勤め先の人と結婚する事になりなした、本当に、お目出度い事なのですが、私は困りました、姉の結婚をうらやんで居るのでは無いのです、姉と別れるのは、寂しいけど、悲しくはありません、私の困ったのは、姉がミシンを、嫁ぎ先に持って行く事でした、姉のミシンはこの私がほとんど使わせてもらっていたのでした。

ミシンと別れる事が、悲しかったのです。私の、ささやかな、お子使い程度の働きでは、どうてい、ミシンは、買えません、まして、父や母に買ってくれとは、頼めません、

私はミシンが玄関先に運び出された時、フタの上から手でそつと撫でてお別れしました。涙の出る、思いでした、

そんな私は二十一歳と言ってもまだ、子供で、姉の心の内は、知るよしも有りません、今思うと姉は「足の悪い、妹が居るのです」と結婚の相手に話した事でしょう、姉は、「中島から、佐藤はつ江、に成りました、」私は自分の事ばかりで、姉の思いに、気が付きませんでした。

ミシンの悪くなった私は、毎日する事が悪くなり。手でする毛糸の 仕事を頼まれ編物の内職をする事にしました。

父がミシンを買ってくれた。

父は、昭和二十年に戦争で、勤めていた工場を焼かれて、仕事が無い時父の後弟と共同で仕事を始めたのですが、それも、うまくいかず、長年勤めた工場が、又始まるまでのつなぎにと、進駐軍に勤めていました、前の会社が、再開したので、進駐軍を、辞める事になり、その退職金が出たのです。父は私に、「久子に、ミシンを買ってやれるぞ」と言ってくれました。嬉しかった、「本当に、買ってもらえるの」と夢の様、

母も「良かったねえ」と喜んでくれました。まだまだ、父や、母には、大勢の家族の為に大切なお金であるでしょうに、私にミシンを買ってくれたのでした。

姉と同じ、ブラザーミシン、今も此の老ミシンは私の住まいに、置いてあり

ます、私と人生を共に歩いてくれたミシンです。

又、仕事が、出来るように成りました。ミシンを、買ったと知ると、

縫って欲しいと言う人が、来る様になり、 洋裁とは名ばかりで、

腕はまだまだ未熟ですが。心を込めてその人の、気に入る様に、

自分の身体に欠陥があるので、お客さまが少しでも素敵に見える、着安い服を造る様心掛けました。部品はよく妹達に、頼んで、買って来てもらいました。

第二十三章 「天理教へ」

二度目の入院の時、私の隣部屋に、盲腸で入院して来た 高橋律子さんのお母さんが、天理教の先生でした。退院してから、私の家に、訪ねて来る様になり、近くなので、せがれさんが、天理教の祭り日など、自転車で、迎えに来てくれました。足が悪くなつてから、友達も居ないし、親切にしてくれるので、天理教に行つて、お話しを聞くのが楽しみになりました。奥い足も、嫌がらず、「早く活る様に」と先生は、

神様に拝んで下さるのでした。なんて良い人達なんだろうと思いました。

天理教で、初めて会う人や、偉い先生に話し掛けられると、胸が、どきどき、口は、がたがたと震えるので、私は話す時は、口びるを、指で押さえるのでした。大人になつて、初めて行った所が、天理教だったのでした。

この口びるの話を今、人にすると、必ず笑うのです。私の主人などは、本当にせず、笑い転げるのです。私さえ、そんな時があつたとは、可笑しくなるのですから、仕方が無いけど。

天理教には、利律子さんの妹に、美智代さんと言う娘さんがいて、ちようど、天理教の、修養科と言う三カ月の修行に、行く話しが出ていました。先生は、私に「美智代が行く時に、チャコさんも行かないか、」と、言う話になりました。又、「面倒は美智代がいるから心配無いよ、」と言うのですが、私は迷いました。行つてみたいが、十一カ所から、うみが出ているし、歩けると言つても家の周りぐらひではと言つと、

先生は、「神にもたれて、行けば心配は無い」と言いましたけれど、お金も掛かります、洋裁の仕事と言つても、三カ月の修養科行けるお金など有るはありますがありませんでした。

第二十四章 「四十二才になると、良い人が現れる」

予言者のお告げ」

二十八年の春の事、私の近所のお客さままで和泉さんと言う奥さんが、いました世話好きの人の良いおばさんです。私との縁で、天理教に、お話を、聞きに行く様になりました。

その和泉の、おばさんが、「修養科に行かれるといいね、おばさんの、知って居る、「占い」に、行ってみようか、」と誘われて、和泉さんの肩につかまってバスに乗り、占いの所に行きました。

薄暗い、神床に座った一人の目くらのお婆さんは、神さまに、向かって、なにやら拝んでから、私の方に向くと、「今は可哀想な娘さん、でも貴方は、晩年には、きっと幸福になれる、四十二才になったら、いい人が現れて、結婚できるよ、この秋に、天理教にも行かれるよ、」と、お告げができました。

私が二十二才の春の事です。此の予言がまさか、全部、本当に、成るとは、思いませんでした。

ともかく、その年 二十八年九月、うみの出ている、足をひきぎずって、奈良県天理市に、行ける事になりました。

おなじ年頃の娘四人でした、

会長の高橋こう先生は、「自分の娘や誰より、チャコさんを、置いてくるのが、辛かった、」と後で話してくれました。

あまり歩けない足で、三カ月の修行でした、

皆に始めは、肩に、掴かまらせてもらい、お世話になりましたが、それぞれの忙しい修行に、一人になってしまい、私は泣きながら、頑張りました、この話は、書いても、書いても書ききれません。又の機会がありましたら、書くつもりです。

その、足との辛い泣きながらの三ヶ月はつらかったけれど、私は一つ、心に、「足る事を知る心」と言う事を、悟りました。

久子の身体は左足一本が、悪いだけ、ビッコは、ひいても、歩ける、まがらない足でも、座れなくても足の役にはたつ、一本の足に、嘆いてないで、健康な、手足、目、鼻、と全部良いところばかり、この良い残された身体を、使わせて頂いて、またより一層頑張ろうと、心から、喜びに、かわり、三月の修行を終えて帰りました。

天理で、夢中で過ごした足は前より歩ける様になっていました。

心の学びと、歩いた事の、リハビリのお陰でしよう、

明るく振舞っているつもりでも、自分の惨めさを感じ、同じ

年頃の娘さんや、男の人の前で歩くのを、見せたくないなどと、

思っていた私でしたが、天理で学んだ教えを、胸にしか修めて

十二月始め、家に、生まれ変わった心で帰ってきました。

第二十五章 「お医者様が一言、奇跡だ」

心から、喜び、いさみ、やらんと している私にあくる、二十九年春、
身体の、ぐわいが、悪くなり近くのお医者さまに診てもらったら、
結核と、診断されました。

天理に行つて、あれほど 喜び勇んで人生を歩みだした私は、暗い谷底
へ、突き落とされた思いでした。

その頃は、結核に罹つたら、もう助からない時代でした、もともと痩せている私
ですが、その上痩せて顔は青白く、見るかげもなく、力なく
眠るばかりでした。

人の心は、ころころと変わるから、「心と」、天理教で教えられました。が、私も
あれほど喜んでいたのに、「神も仏も有るものか」嘆きました。が、でもよく
考えたら死んで楽になつたほうが、幸福かも知れない。神様は、私が一生懸命、
生きようとしても、「お前はむりだよ」と

言つて、いるのかしらなどと、自分の不運を嘆き、死んで楽になりた
いと、生きる望みを捨てて、ひたすら、神のなすままと、思えば、気が
楽になりました。（捨ててこそ 浮かぶ瀬もあり）と昔の人はよく言つたもので
す。

それから、不思議なほど、静かな心で、過ごす毎日がつぎきました。
そのしぶんアメリカから、ペニシリント、ストレットマイシンと、言う薬を、日本に
も持つてきてくれたのです。日本もだんだんその薬を、

使える様になりました。一回が、三百六十円、大金でした、私の為にお金
がどんどん出てゆくのです、薬なんか無駄だと思いましたが、

天理教の先生は、諦めないで神様を信じるのだと言つたのです、
そして、三年間お化粧を、止める様に言はれました、どうせ死ぬのだから、何
でも止める事にしました、近くのお医者様なので、そろそろ歩いて行つたのでし
たが、三ヶ月ばかり通いましたが、母の、お金の遣り繰りを見て、なんて自分は、
親不孝に生まれて来たのだろうと思ひました。

私は三百六十円を、週二回、母から貰うのが、辛く、母に、「もう良くな

つたと、お医者さんが言ったよ」と嘘をついて行かない事にしました。行かなくなつて、三月が経ち、秋になりました。

医者に来る様にどの、お医者様からの連絡に、母は、驚いて私を、お医者様の所へ連れて行き、レントゲン、撮りました。

次の日、「一人でもいい」と言つて私はレントゲンの結果を聞きに行きました、

診察室に入ると、お医者様が、私の胸のレントゲンを手に唸りながら、部屋の中を、行ったり来たりして、口も訊きません、私は、「やっぱり、もつと悪くなったのか、」と思つて覚悟しました。

最初に、お医者様が、言つた言葉が、「奇跡だ、」と首をかしげながら言うのでした。私には何の事か分かりません、「どうしたのですか」と先生に聞くと、やつと先生は椅子に掛け、レントゲンの写真を、

透かして見ながら、「直つているんだよ。どうしてなのか、わからない。おかしい」ただ、それだけの返事でした。

私の結核は、ほとんど、治つていたそうです、

それも肺の中に濃胸ができていて、末期で、助からないほど悪かつたと、あとで、お医者様に聞きました。

それどころか、一四年間 出続けていた、足のうみが、少なくなつたと思つていた、やさきでした。

先生は、治つても念のためにと、言つて又、ストレットマイシンを、少し、うちました。足の、うみは、少しづつですが、少なくなり、半年位した頃から十一ヶ所から、出ていた、うみは、すっかり止まりましたが、

包帯を取ると歩けないほど包帯が、私の身体の一部になっていました。

神様は足を活して下さつたのです。

天理教の親神様は、やはり私を助けてくれたのでした。

結核に罹らせて、ストレットマイシンを、うたせたのも、神のなせる、

(わざ)と、後で知つたのでした、私は神様との約束どおり、お化粧を三年間致しませんでした。又、死にはぐれましたが、今度の死にはぐれは、私にとって幸福の死にはぐれでした。

身も心も生まれ変わった私は、今まであまり、明るい方で、なかつたのでした。が。(命の朝が来た。)のです。

足、足、足の悩みから、開放され、それから、日増しに足に力が、付いてきて、人よりは、のろい歩きかたでも、一人で街にも、行ける様になりました。

治ったと言っても十年も寝たきりの足の膝は、曲がらず、腰も曲がりが悪く身体は棒の様ですが。座椅子や、腰掛を使えば、座れます、毎年出ていた、ぜんそく、眼病、おでき、も、除除に、治って、生きている喜びある、生活が始まったのでした。

その年の暮、二十九年十二月、二十五日、身体障害者手帳を、頂いたのでした。

翌三十年、四月一日、妹、榎佐子は、中学を、卒業して、父が、決めた、床屋に、住み込みで、修業に行きました。

家から、歩いて十分ぐらいの、近いお店でした。

私も、長い間お休みしていた。洋裁の仕事を始めました。

世の中が大きく、変わってきました、テレビも、あちこちの、お金持ちの家に、見られる様になり外国の、ファッションも、日本に、入ってきました。今までの「アップパー」の服ではなく、洋裁と言う名に、

ふさわしい、婦人服のデザインも、本で見られる様に成り、

お客様からも、難しいデザインを頼まれる様になってきました。

第二十六章 「私の小さな仕事場が出来た」

その時分は、夏になると、何処の家でも夜、蚊帳を吊ったものですが、そんな狭い部屋の片隅で、每晚、ミシンを踏み、夜なべ仕事をするのです。

ある日、布団に、針が刺さっているのを見て、ドキッ、とさせられました。大変な事にならない中にと、父は知っている大工さんを頼み、玄関を改造して、私の仕事場、(四畳半)と、台所も造り直しました。

私も、川口市役所から、身体障害者、更生資金を、四万円借りて、あとは父が全部出してくれました。

これで、私の仕事場、小さなお城が出来たのでした。

竹の子生活も底をつき、私に、さんざんお金を使い、我が家の生活は、大変でした。母が、よく言う言葉に、「久子は、お嫁に行かなくてもいいんだよ、倉があつたら、三つぐらい、つぶしたぐらい、お金が掛かっているんだから、安売りは出来ないね」と結婚は、難しいと言えない、親心の冗談でした。

私が少しずつ、健康な身体に、なつたし、母は、一切を、私に頼んで、家政婦の仕事にでました。

父と、妹二人、弟の面倒を見て、洋裁の、仕事をするのです。

朝、皆に、お弁当を作って出し。昼間は洋裁の仕事、夕方、妹達に手伝ってもらって、夕食の支度をして又、夜、時間があれば、洋裁の仕事と、今度こそ、仕事場を持った、洋裁師の気分になりました。

けれど仕事は、そんなに、甘くはありません。

お金を頂く以上は、お客様の氣に入つて頂かねばなりません、

新しいお客様も増えてきました。初めての方などの寸法を計る時は、姉から聞いた洋裁の先生の、おっしゃった、言葉を思い出して、

ビクビク しないで胸を張り。私に、おまかせ下さいと言った態度で、寸法をとり、デザインを決めます。

初めての、生地や、むつかしい、デザインなどの時は、お客様が帰ってからが大変です。 さて どうやって仕立てたら良いか。

本と、首つびきです、頭の中は、仕立てる服の事で、いっぱいです。

でも何とか仕上げますが、わきの下から汗の出る思いに、日々を送る事もありました。

技術三分に、度胸七分とゆう、私の心臓だけは強かったようです。でもその冷や汗が、一ツ一ツ私の仕事の血となり、肉となったのでした。その頃は仕立て代金を頂く事が嫌でした、お客様は喜んで下さっていても、自分としては、満足が出来ないので、心で決めていた、仕立て代金より安く頂くのでした。

母は泊まり掛けて、六年も、病院の家政婦をして、働いてくれました。父も私が大変だと言って、家の中の事を手伝ってくれました。

妹二人も会社に勤める様になり、夜は、夜学に通うようになりました。ともかく私の仕事も多くなり、お預かりする品物は、直し物より、新しい布地が多く、お陰様で、新しい、お客様が、入づてに、聞いて来て下さるので、す。

品物は、だんだん高級なもので、もう外国品が出始めました。

足が良くなって私は身体が太ってきました。洋服を仕立てている私は、冬だけ、着物を着ていました。

靴が履けなかったのと、身体が变形して居たため、着物の方が、格好

良く見えて、その上暖かくて良かったからでした。弟雄司の、PTAにも行き、着物を着ていた私は、お母さんですか、と言はれました。

仕事をしたり、食事の支度をしたり、まだまだ 活ったとは言え元気な人ほど、動けない私でした。

母が働いて六年たった時私は母に頼みました、「お母さんが働いてくれて、家は楽になったけど、もし、此のままだと私の仕事が出来なくて

洋裁の仕事が、中途半端に成りそうなの、だからお母さんに家に、居てほしいの」とお願いすると、「母は、分かってくれて家に居るようになりました。私は、それから仕事ひとすじに出来る様になりました。

第二十七章 「仕事ひとすじ」

私は、身体もますます丈夫になり、「骨皮筋衛門」と言われた私が、太り気味の丸顔となり、何時も、仕事場は、私の、おしやべりの声か、ミンシンの音か、ラジオが、掛かっているのです。

母が家に居てくれる事は、私にとって幸せでした。

お客様の仕事をさせて頂きながら、腕を磨きました。

なかなか思う様に出来無い事が、会得出来た時は、「やったあー」と心の中で嬉しくって、一人、手をたたくのでした。

そして一つ一つ自分で。苦しみ、喜び、仕事に打ち込む日々が、続きました。人に教わったのでは、ないのですから、しつかりと、頭の中に入って、忘れる事はありませんでした。

又、お客様の話から、社会の事やお一人、お一人の気性から、自分なりに、学ばせて頂きました。

洋服を作る、お客様は、それぞれ、心の置き方が違います。おのずと、

仕立てを頼む気持ちや、いろいろです。お呼ばれや、ばん、やもうえないで、作るか、身体に合う服が売って、ないとか、お金が有って、

方。目的は、ストレッチ解消に作るか、生地が有るので、洋服に仕立てておこうとか。

又デザインが、やたらに、凝っている方、

身体の癖を気にしすぎる人、細かい事に神経質な人何でも、良いからと、おまかせ型、でも、私の仕事は、どんなお客様にもそれぞれの、

思いに入って、出来るだけ喜んで下さる様に、相談し、

気に入る洋服を、仕立てる事だと、努力するよう心掛けました。

仕事と、人間関係の、むつかしさも、言葉の使い方も自然とお客様から勉強させられました。一度もトラブルも無く、お客様に可愛がられて、仕事に励む事が出来ました。

時には一日お客様が、ひっきりなしに、来て、仕事の話や、おしやべりに花が咲き、仕事の手につかず、いち日が終わる時もあり、

これも、仕事のうちと、夜なべに、精を出すのでした。それでなくても夜なべ仕事は、ほとんど毎晩でした。

日曜日にも家に居る限りは、仕事をしてしまいます。

大人になった 妹達に、今日まで私がお世話になったお礼心にも、姉としての勤めと、植佐子の赤屋の修業中は、洋服の仕立て代は、もらいませんでした、良子、邦子、の二人も、夜学が、終わるまで、もらわず、

それは、私の出来る精一杯の妹たちへの感謝の気持ちであり、父や母に喜んでもらえる心の表れでした。

三十八年、四月、弟の雄司は、中学を卒業して、父の決めた花屋に、住み込みで、働きに行く事になりました。

弟は、女の子中の男一人です、父や母は家に置きたいけれど

甘やかすと、しつかり、しないと云う考えから、他人の飯を食べさせた方が良い、と言って、花屋の仕事を覚えさせに出しました。

姉弟の中で、植佐子と、雄司だけ、住み込みで、働いたのです。

第二十八章 「妹、良子の結婚」

雄司が花屋になつた年の、三十八年十一月妹良子が、結婚しました。

小さい時、頭の髪の毛が薄くつて「さといもちゃん」と呼ばれていた妹が、花嫁さんになるのです。もちろん髪の毛は、ふさふさと、豊かな 可愛い女性になりました。姉弟で、お金を出し合つてコートとスカートをプレゼントしました。もちろん私の、仕立てです。

（生地は、グリーンのアストラカン）

妹は、青藤良子になりました。結婚式を目出度く、終わり、東京駅まで、姉妹で新婚旅行に行く二人を、見送りに行きました。

ホームで妹、邦子が泣くと、私達も、なぜか皆で泣きました。

家に、帰り父や母に、無事、新婚旅行に、立った事をつけ、ほっと一人になった時の、さみしさ、私は、その夜自分の事を考えました。

妹が、うらやましいと、言うより自分が、可哀想だったのでしよう。

一人布団の中で涙する私でした。さみしい、かなしい、夜でした。

翌朝、目覚めた時私は、心は、穏やかに明るい朝をむかえました。

私は自分に、「すっかりなくては、もし結婚は出来なくても、

皆の幸福を祈れる人に成ろうと考えました。私は神様の教えが頭に うかびました、もし悲しみが、私を追いかけて来たら、逃げださず、

こちらから、飛び込んで往けばよい。人に突き落とされるより、自分で飛び降りる方が痛く無いと同じように。」

第二十九章 「自信と、うぬぼれ」

小学校三年きり、行ってない私は、字が下手で、寸法を書くのが苦手です。高い値段の品物を預ける人や、初めてのお客様など、こんな字を書く洋裁屋では、洋服の出来栄えが心配ではないかと、恥ずかしく、よく言い訳をしまわう私でした。

そんなわたしに、一人のお客様の言った、一言が私に大変励ましになりました。「貴方は洋裁の仕事が、これだけ出来るよ、という事は、大したものよ、一つだけ、秀でたものがあれば、それだけで立派よ」と

言って、下さった事です、言葉は人を生かすも、殺すも出来ると思いました。それから、字が下手でも仕事で勝負という心になりました。また何人かは、私を先生と呼んで下さる人もいるのです、今では、ちよつとした職業でも、マスターとか、先生呼ぶ時代ですが、私には、似合いませんでも少し、嬉しかったけど、「先生だけはやめて」と言うとその人は、

真面目な顔をして、「あら貴方は、立派な先生よ」とまたいうのです。心のなかで私は、「ま、いいか？」先生と呼ばれる事も悪くないかなと、だんだんお客様におだてられその気になってくる日々でした。

ある時、父が「久子、よくお客様が、来てくれるね、父さんが奥で聞いていても、なかなかお前の仕事も人柄も好かれて居るみたいで、いいと思うよ、だけど、うぬぼれが一番敵だよ、」と父は、職人ですから、よく分かるのです。父の一言が胸に、今も、忘れません。

自分でも気が付かない、うぬぼれを、父に見透かされ思っていた、そうだ自信を持つ事は良い事だけど、うぬぼれは、知恵の行き詰まりと、教えられた事を、思いだしました。

第三十章 「榎佐子の結婚」

理容のお店に住み込みの、妹、榎佐子が結婚する為十年お世話になった、床屋の高橋さんから四十年のお正月に、帰って来ました。

中学を終えるとすぐに、住み込みで働きながら仕事を教わり、理容学校を出してもらい、理容師の資格も取り、中学校を終えて家に居る時がなかったので、お嫁に行く前少し、家で、過ごさせてやろうとの思いでした。

新婚旅行着は、又、姉弟で、お祝いしました。

ブルーウのウール地で、スーツに、ピンクのブラウス。仕立ては、やはり、私が作りました。

榎佐子の送別会にと、家族で。上野の鈴元で、寄席を楽しみ、葵と 言う天麩羅屋さんで、食事して一日楽しく過ごしました。

榎佐子がお嫁に行くまで、私はお客様の仕事が出来ず。焦りましたが。

長い間家に、居なかつた妹の一生一度の幸せの日々だと、一ヶ月半ばかりを、榎佐子に付き合いました。四十年二月十五日、

目出度く。榎佐子は、後藤榎佐子に、なりました。相手の方も。

理容店を持った人でした。

第三十一章 「自動車免許―取得」

四十二年の暮れ十二月初め、市役所から、障害者にも、自動車免許を希望する者は集まる様にとの知らせが有りました。

前から、私は車の免許を取って車に乗りたい、そうしたら一日がかりで、仕事の部品を、買いに行かなくても良くなる、と思っていました。

まさか、本当になるとは、思いませんでした。集まりに出掛けました。

女性は、私一人でした、十二月は、私にとって一番忙しいので、

お正月から、始めました。一月四日、嬉しさと、不安な心で、

ノーク

ラッチ式の車に乗って、教習所の先生に教わりながら、初めて、車が動いた時「先生動いた」と歓声を上げてしまいました。

さすがの、先生もおこれず。苦笑いをしておりました。

二月八日見事、実致試験は、一発で受かりました。「バンザイ」
心の
で叫びました。暮れから初めていた人を追い越し、男一人と私
女一人。チサン教習所で、障害者、初の、合格者になったのでした。

そして、大宮での学科試験に、チサンの高橋先生が連れて行ってくれました。

先生は私が、小学校も、ろくに出てない事を知っていて、心配だったそうです。

私は劣等生なんだからと、一ヶ月仕事もせずに、

二冊の教科書を、丸暗記して行ったのでした。

学科も一発で、受かりました、三度も見直して、早々に、教室を出て来た私
を見て、先生は答えを、片っ端から、丸を付けて来たかと、思ったそうです。

でもまだ、路上運転した事は、ないので、身体障害者は、路上運転 教
習無しの、免許証なのです。私は、晴れて、教習所の先生に、脇に 乗って
もらい、表にできました。

空は青く澄み渡った日でした。街を、初めて自分で車を運転する
嬉しいやら、こわいやら、胸は、ドキドキです。陸橋です。坂道を

登り始めた時、目に空だけが、映りました。「あつ」と心の中で叫びました。私
は「空を飛んだ」と、錯覚に襲われた瞬間、そうですそれは、

私が足を、手術して寝たきりの時、夢の中で、よく、スーパーマンの 様に、

空を飛びすきな所へ飛んで行つたのです。今、本当に、空を飛んでいるのです。

「夢ではない、夢ではない」と大きな声で、叫びたくなりました。

私には、この運転免許は、神様が、人生を大きく変える、杖と、偉大なる足を私に下さったのでした。が

今まで貯めたお金で、五人乗りの乗用車を買いました。

初めて、車が家に届けられた日、まず父と母に乗ってもらつて、

近所を一まわりしました、まさか、私の運転する車に乗れるとは、父も母も、思つても見なかつた事でしよう。

私の家の前の奥さんは、私に、「チャコさんがよく、車に乗るんだと、

言っていたでしょう、足が悪いのに、まさかと思っていたのよ、でも、

本当に乗ってしまったのね、おめでどう」と言はれました。私だって、

まさか、本当になるか、どうか、ただ、夢は大きく、持っていた私ただけでした。次の日、電柱に、少しこすつて、車に傷を付けてしまいました。

車を四十二年四月四日に、買って、直ぐの事、

埼玉県身体障害者、福祉協議会で、行く、障害者自動車パレードに、参加させて頂く事になりました。

車を買つて三日後の四月七日、三峰神社での車の、安全祈願に出かける事になりました。傷を付けてしまった新車に、御払いをしてもらいたく、私の車で行く事を、お願いして、川口市から、会員の、ベテラン運転手の大村さんと、矢場さん、私と三人で、行きました。埼玉県の、各、市から、障害者を持ったドライバーが、マイカーで川越の市役所に五十台集まりました、川越市役所を出発。秩父の三峰神社まで、各、信号毎に、警察官が、立っていて、車は、ノンストップ私も、心臓強く運転させてもらいました。あとで大村さんは、「あの時のチャコの運転は、こわかったよ」と、笑い話にされました。三峰神社に、もう少しと行つた時、

町中に聞こえる、スピーカー、マイクで、「只今、埼玉県障害者の車のパレードが到着しました。拍手を、もつて、お迎え下さい、此の中になつた一人女性のドライバーが居ます、皆様よく、頑張つて 下さいました。」と 其の時初め

て、女の運転は私、一人だった事を、知りました。埼玉県でも其の頃は、一

般でも、女性ドライバーは、少くない時代でした。

三峰神社の宮司さんが、すべての車に、安全祈願の御被いをして下さいました。

車という足を、授かって、お客様の家にも、仕事の部品も、らくに買いに、行ける、様になりました。又家に来た伯母さんを、(父の妹) 駅まで送った時の事、伯母さんは私に、「まさか、チャコさんに車に乗せて、
もらうなんて、思いもかけなかったわ」と褒めて頂いた時は、免許を
採ってよかったと、思いました。

第三十二章 「障害者と共に」

ある日市役所の、障害者福祉課の係長さんが私の家の仕事場に来ました。高橋係長は、「チャコさんに、頼みが有るんだ、青年部と、スポーツ部会が、うまく行っていないんだ。二つの部会の、ブリージッ役も、

チャコさんなら、やってくれと、考えてきたんだ。」との事。

市役所の人も私の、名をチャコさんと、呼んでいたのです。

大変な 役目を、頼まれたと思いましたが、其の時はすでに、青年部の陰の相談相手でした。

気楽にやるさと、引き受けました。其の時私は三七才、自分で言うのも、おかしいのですが。若く見え、会の、十代や二〇代の子と話しても

自分では、差を感じられない程、気持ちも若かったのです。

やっと、私の青春が来た頃だったのです。自分も、楽しく

市役所から、頼まれた思いも、心に秘めて、若者と、色々な行事に出たり、スポーツ部の水泳にも参加したり、夜遊びも付き合って、

若い子達と心を許し合える同士になり、市役所の方も若者の気持ちになって、協力してくれ、何時かしら、青年部と、スポーツ部の間が、狭まり、二つの部会でクリスマスや、運動会など、仲良くやれる様になりました。

私は、若者に、振り回されながら、食事に行ったり、論じ合ったり、若者の前に立たず、後ろから付いて行きながら、色々な問題を考えました。仕事と会の板ばさみで、夜遊びから帰って、徹夜する事も度々でした。そんな事も出来るのは、車があればこそでした。でも、私も楽しかった。私はよく言うのです、「若者のエネルギーと、活力を自分の力に頂く」市役所に、頼まれたことなど、忘れて、会の皆が、可愛かったのです。

皆も私みたいな、オバサンを、「チャコさん、チャコさん」と慕ってくれました。何時か二つの会は一つ、に、まとまり、名前も改め、「青年婦人部会」と、なりました。

私は、よく障害を持つ若者に言うのです。

「身体の悪い事を、恥じる事は無い、こそこそと、びっこ、ひくより

胸を張って歩けばいい、人は、面白がつて見る人は居ない。もし居たとしたら、その人は、可哀想な人なのだ。

そして、身体に障害は、有っても、気持ちだけは、ひがまず、ひねくれず、素直に、心の、障害者に、なりたくない、」とあるとき、この話をしたら、どう勘違いをしたか、身体障害者を、悪く言っていると、怒った人が居た。勘違いも甚だしい。

又障害の身でありながら、障害者と、交わる事は、自分は、健全者と、おなじだから、恥ずかしい事だ、と言う人、それも、一つの考え方だと、思いますが、それは、自分の、障害から、目をそらし、健全者と、付き合う事に、よって、健全者同じだと思ふ事は、自分の障害さえも恥ずかしい事だと思ふ、心の裏返しだと思ふ

その反対に、障害者同士の付き合ひだけで、健全者と交われない心も、寂しい、と思ふ、

健全者も障害者も同じ心で、付き合う事が出来る事が、私には、大切な事だ、と思ふなどと、えらそうな事を、言ってる、私も、大勢の人と知り合ひ、どうやら、出遅れの社会人の一人となりました。身体も心も、丈夫になりました。

仕事も益々、忙しく、有るときは、町の洋裁店の仕立て代より、私の方が高い位に、頂いても、お客様は、来て下さいました。みんな良い品ばかりで、舶来品が嘘のように、山積みされ、狭い家が私のお客様の、品物で、何時も座敷まで、占領してしまいました。

昭和四十五年四月二日、埼玉県身体障害者福祉協会から、私は、自立更生の表彰を、されました。市役所の方から、「学校も行けず、長い闘病生活の中で、独学で、洋裁を覚え、仕事場を、構え、そして、車を、足に障害者の一員として、会の活動した事を認められて」と言われました。嬉しかった、こんな、私に社会人として認められる賞を、頂ける事の幸せを、

翌年、市営住宅に入れる事になりました。妹邦子と、住むことに、なりました。

仕事場は、やはり青木町の家に通って洋裁の仕事をする事に、でも、

この住宅が、青年婦人部会の、集まりや、男性も交えた役員会と使える事ができきました。女性の集まりは、又、にぎやかに、部屋いっぱい、

いざつて、歩けない人腰が二つに、折れたままの人、手と、足の色々な障害を持った女性ばかりで、お揃いの、洋服や、又、小物入れを、作ったり、お料理を作つて、食べたり、おしゃべりに花を咲かせて、

楽しい一日をすごすのでした。部屋は、六畳と、四畳半と、台所です。

第三十三章 「私が、初めて仲人に」

私が、仲間の若者の仲人に、なる？ お二人は、会の顔見知りの、仲の良
い者同士、ただ結婚と言う事は、なかなか面倒なもので、

お二人の結び会う為の、橋渡しの、お手伝いをさせて、頂いただけです、
一人者の私は、仲人する事を、一度は、辞退しました。が、大村さんと言う障
害者の役員さんが二人の事を、元々心に掛けて居た方なので、私と、二人で、
仮の、夫婦役で、仲人を、務める事になりました。

結婚してない、私が、仲人に成るなんて、と思いましたが、心から
嬉しかった。

四十六年四月五日、鈴木君と、小宮さんの、結婚式は、大宮の、氷川神社
で、行はれなした、私は、母の江戸妻を、着て花嫁さんの、手をとり、親族の
方々と、障害者の仲間が、ぞろぞろと、後ろに、ひかえ、

花婿さんも、花嫁さんも、仲人の私も、ビッコをひいて、玉砂利を歩いている光
景は、知らない人から見れば、ふしぎだったでしょう。重い、かつらに、花嫁
衣裳、小柄な、花嫁さんは、私にそと、

「チャコさん、腰が痛くなっちゃった、」と言うのです。私は、
「じゃあ、少し立って居ようよ」と言って花嫁さんの、手をとったまま、
二人で暫く立ちつくしました。しばらく立っていても後ろの列からは、
誰もなんとも言いません。さすが、障害者の、気持を、知っている人達ばかりで
した。仲人と、言うより何時もの姉さん気取りの気分でした。

江戸褌を着て、車を運転して我が家に帰り、ホットして、人の幸福を
願って居る自分なのに、なぜか、心寂しくなるのでした。

でも又、幸福をつくる人になりたいと、願う私なのでした。

第三十四章 「障害者にも、二種免許を」

四十六年の秋私の、親友から、「ある青年が交通事故で、左足を切断して、病院に居るから、今後の相談相手になってほしい。」との連絡に私一人では、荷が、重すぎると思い。会の役員である大村さんと二人で、病院に行きました。鑄物関係の仕事をしていた。青年でした。

障害者手帳を取得して、義足を、作り早く社会復帰したいとの、元氣な若者でした。大村さんのお骨折りで、手帳も、義足も出来ませんでした。いくら、しつかりした若者でも、突然の、片足になった彼には、シヨックだつたでしょう。片足になった彼の為は大村さんは、もつと

ひどい人達が、大勢いる施設などを、自分の用事にかこつけて、彼を、連れて行き、重度の障害を乗り越えて、働いている所を、見せてあげました。私も必ず一緒に、お供して、行き帰りの、車の中での、おしゃべりも、私なりの、一役かっっていました。

彼は、その後、重度の障害者が働いて居るのを、見て、シヨックだつたが、それが、彼にとって、自分も、頑張って見ようと、奮起出来る、力になったと話してくれました。

彼は、普通免許を持つて居ましたが、片足で、二種免許をとり、車で、生計を立てる事を、考えました。

ちようど、其の頃、チサン自動車、教習所でも障害者にも、二種免許を、と考えて居たのでした。チサンの所長さんは、彼の力に、なつて、くれる事を約束してくれましたが、それから、大変でした。

所長さんは、各、関係方面に打診しましたが、

(身体障害者と言う、ハンディキャップからして、職業運転は、無理)と警察庁交通局の言い分です、又、今まで、前例が無いと、厚い壁に、

障害者の二種免許は、難しい問題でした、それからのチサンの、所長さん、大村さん、私と、三人は、埼玉新聞社や、警察所に、改善の、要望を、行いました。最後に、三人は、労働省に行き、山口政務次官に陳情しました、私は、

「障害者に、出来る仕事を一つ増やして欲しいと、」一生懸命に、話しました。あとで、大村さんに、「お前は、よく喋れたね、」と言われました。二人は、思うように話せなかつたど、ぼやいていましたが、

私は、「めくら蛇、モノに、おじず。」と言うこと、だけだったのでした。

昭和四十八年六月一日此の事が、埼玉新聞に、大きく、取り上げられました。大村さんと、私の、ことも書いて有りました。

そして、運動を始めてから、四年後、陸運事務所の、許可も下り。二種免許を、手にしました。彼は、蕨駅の、タクシー運転手になりました。

この事も、五十年十月一四日の、読売新聞に、これも、大きく、載りました。

大村さんも、私も、涙の出るほど、うれしく、よろこび、ました。

それから彼は、結婚をして、子供さんも、授かり、幸せに、なりました。

話しは、前に戻りますが、四十七年十月十五日、一緒に住んでいた、妹、邦子が、結婚、姉弟で、私の仕立てで、結婚の、お祝いに、

紺のダブルジョーゼットで、パンタロン、スーツを、プレゼント、しました。邦子は、森田邦子になりました。

これで、妹たち三人が、嫁いだのでした。

掃除、洗濯、と何でも、やってくれた妹でした、

親の居る、青木町で、仕事をして、朝日町に帰ると一人に、なってしまうのでしたが、此の朝日町に、障害者の仲間が、相談やら、遊びにと 来るのです。

私は家に帰っても、洋裁の夜なべ仕事を、するのでした。

第三十五章 「また、仲人を」

ある時、前もって連絡してきている、会員の、青年が朝日町に一人で、来ました。改まった話とは、「僕にお嫁さんを、世話して欲しい」と、言うのです、真剣に、頼むその気持ちに、私は、誰か好い娘を、捜して上げたくなりなした。

障害者の結婚は、なかなか難しい問題です、皆も一番の悩みです。彼は、交通事故で右足、ももを、切断して義足でした。中々の好青年、それから暫くして、私の頭に一人の女性が、浮かびました。やはり足の障害ですが、静かな娘で、器量も、良く、お似合いです、彼の家で、私と、 三人で、話し合いました。

二人の気持ちも合ったところで、私、一人ではと、思い、大村さんに話をして、二人で、日を改めて御両家の親御様を、訪ねました。御両家の方からも、大変喜ばれました。

私の出番は、これまでに、と固くお断りしたのですが、大村さんと、

二人で、是非との事でした。大村さんも、この二人は、前から可愛がつて居たので、又、大村さんと仲人を、させて頂く事になりました。彼のお父さんは、数年前に、亡くなって、お母さんの願いは、彼を結婚させる事だったそうです。「父親のお墓に、報告して来たのですよ、」と涙を流して喜んでくださいました。

昭和四十八年四月二十八日、鳩ヶ谷の、氷川神社で、大村さんと、私の仲人で、めでたく、石井さんと、平柳さんは、結ばれました。花嫁さんは、ウエーディング、ドレス私は、ロング、ドレスを着ました。

二人が、「チャコさんありがとう」と挨拶された時「おめでどう、良かったね。仲人の、チャコさん、一人者だから、あまり見せつけないでね、」と、ちよびり、本音を覗かせてしまいました。その時私は、四十二才、

二十年前、占いの、お婆さんから、「四十二才になったら、良い人が現れる」と、予言されていた事を、思い出しもしませんでした。

人の幸せを願う事が私の、幸せでした。

第三十六章 「二十年前の、予言どおりに」

私の友人で、夫婦で障害者の方が、クリーニング店を開業しました。仲人の役も無事に終わり、次の四月三十日、おくれればせながら、お祝いの顔を出しに出掛けました。クリーニングの、立派な店が出来ていて、大村さんと私が祝った、時計も掛けてありました。

「おめでどう」と言いながら、勝手知った他人の我が家と、

ずかずかと、上がっていききました。すると奥の部屋では、夕食でした、

見知らぬ男の人が、旦那さんと、ビールを飲んでいました、大きな声で入っていた私は少し恥ずかしくなり、「あらお客様なの」すると

奥さんが「この人クリーニングの職人さんで、始めたばかりで、大変だろうと、休みなのに、手伝いに来てくれたのよ」と言うのです。

この人が、私の夫に、二十年も前から決まっていたとは、知るよしも、ありません。その人は、しかも健全者でした、あとで主人に、あの時の私の事を、（色気の悪い女だと、）思ったそうです。それから後も家の者の洗濯物や近所の人の分までも持っていくのです。すると、良くその職人さんに、合うのでした。ある日仕事場に、奥さんから、電話が有り

「今日関根さんが来て居るのよ、今晚来られたら、何か皆で食べられる、夕食の、惣菜の材料を買って来て作ってくれないか、チャコさんも、家で食べるつもりでね」と言ってきました。

関根さんとは、いつもこの店に手伝いに来ている、職人さんのことです、

私は少し、早く仕事を切り上げて、夕食の材料を買って奥さんの助けをする事にしました、そんな事が、度々呼ばれて、夕食の、手伝いを、する様になりました。ある時、この職人さんに「子供さん何人居るの」と聞いたのでした、奥さんは、「関根さんまだ、結婚してないのよ」との返事に、「あら御免なさい」と私は、謝りました、

男の人なのに、色が白く、背丈は一七〇センチ位の、口重な静かな人です、私より、六つ下との話でした、この店で、手伝った日は、何時も

夕食を食べて帰る訳が判りました。

そして店や物を、食べ飽きっていて、家庭料理が食べたいだろうと思つて奥さんは私に夕食の応援を、頼んだのでした。

店の旦那さんは、職人さんが、帰る時、酒酔い運転で駅まで、何時も送るのです。

私は、「お酒を飲んで車に乗つてはいけない事故が起きたら大変、私が駅まで送つて上げる」と駅まで自分の家を通り越して送つていくのでした。

新しく始めたクリーニングの店に、事故の心配をさせたくない気持でした、何時ものお節介婆さんの癖が出ただけでした。初めは駅まででしたが、そのうち、職人さんの家のそばまで送つて行く時もありました。

七月四日私の家の月一回の、天理教のお祭り日です。

先生や、母や、青木町の小母さん達、先生のお話を聞き私の手作りのご馳走を、食べて、楽しくひと時を過ごすのでした。

その帰り皆が表に出たとき。ドアの所で、腕を掴まれ、小さな声で私に、「チャコさん、まだ、いい人見つからないの」と、和泉の小母さんに、

聞かれましたが、「え・まだ、見つからないけど、今なんとなく男性の知り合いが出来たよ」と返事をする。和泉さんの小母さんは、

きつぱりと、「間違いないその人だよ、結婚する人は、」と突然に言うのです。

私はビックリして「違うのよ、知り会つただけで、関係ない人よ」と強く否定しました。本当に、本当に、そう思つたのでした。

後で聞いた話ですと、和泉さんの小母さんは、前の年の暮れ頃から、皆に、

「チャコさんは、来年は好い相手が、見つかつて、四十二歳になったら、幸福な結婚が出来るよ、と、二十年前占いに言はれたのだから」と、言い歩いていたので、その話を聞いた人は、「本当かしら」と笑つて、信じなかつたと聞きました。

七月になつても何も私が言はないので、我慢が出来なくて私に聞いたのでした。

我が家は。花屋の弟の結婚話が始まりました。お嫁さんは、花の仕事している娘さんでした。

弟は、花屋の店とお嫁さんを、秋までに、一緒にと言う事で、店を借り、開店の支度で私の家は、てんやわんやでした。が

私も時々彼に、ひそかに会う事も多くなりました。彼も私と結婚する気は無い様でした、私も彼に結婚してもらえらるるとは考えられませんでした。

でもこの年まで生きて、一生の思い出も無く死んで逝くのなら、私だって、一度位素敵な夢を、見たって、神様は許して下さるはずと、

自分勝手に考えて、私は、六才も年上、その上、身体は、不自由、器量は、良くない、三拍子が揃って居るのだものと、思いながらも、今までに無い幸福な毎日でした、そして密かにデートを重ねました、

其の日も、クリーニング屋さんの手伝いの彼を送る車の中で、彼が、「この頃、五分、五分、なんだ」と言うのです、私には、その意味が、判っていません、「何が？」とは聞きませんでした。

それから、また、何度かの送り時、彼が、・ポツンと言うのです。「四分六分なんだ」と、……

私はそれが、彼の私に對しての、プロポーズの言葉だとすぐ判りました。それから。彼との仲が百パーセントになるのに、間がありませんでした。

弟の、花屋の店も、開店出来るまでに、こぎつけたし、

結婚の日取りも決まり、さて、お仲人と、言う事になり、大村さんと、久子は今まで二回も仲人の経験も有り雄司の仲人は、二人に頼みたいと、父と母、弟も、言うのです、でもお嫁さんの家に、足の悪い仲人では、

と言ったのですが、お嫁さんの方も、それで結構ですとの事に、

三回目の仲人をする事になりました。二回目の、石井さん達が挙げた、鳩ヶ谷の氷川神社で挙げる事になり、

四〇八年九月三十日に結婚式の、無事仲人をさせて頂きました、

弟の小さい時は、子守をして、学校の、父兄会に出てお母さんと間違えられたりで、花屋に、勤めてからも何かと相談役でした、弟と言うより子供の様に思っていました。新婚旅行から帰るとすぐに、

花屋の開店と、お目出度が、続きました。

店の名前は、「花源」と付けました。父の源吉の名前から、でした。

十月中頃弟の事も一段落した所で、父と母に、初めて、彼の話しを、

しました。父も母も、私の話に驚きました。私は、弟の事で、皆

一生懸命だったので、言い出せず黙っていた事を詫びました。

家に関根さんを連れてきて、両親に、会ってもらいました。

父は、こころよく向かへてくれましたが。

母は、座敷に、チヨット座ただけで、台所で、忙しいふりをしてろくに、口も聞いてくれませんでした。

妹たちの相手の時は、ご馳走を用意して、迎えた母が、何故だったのでしょうか。わろわろ？

それは、私が突然話した事も、母には、シヨクだったでしょう、でも私にとって、弟とかち合った事と関根さんの本当の気持ちを確かめるための、時間が、欲しかった事などの理由でした。

帰り送って行く時、彼は、私の心を察して、「貴方と結婚するので、心配しなくても、いいのだよ」と言ってくれたことは、私にとって、

大きな、愛の心に包まれた思いで、うれしく、今も、忘れません。

御両親は、彼の、小さい子供の時、亡くなられて、お姉さんと、妹さんが、いました。

お二人共、私の結婚について「兄ちゃんが、良かったら」と賛成してくれました。

ところが、私の居る川口では、皆が心配、

市役所の、障害福祉課の課長さんが、私の仕事場に来て「チャコさん結婚するんだって、本当。僕、その人の身元を確かめてあげよう」と言って来たのです、

私は、「結構です。もし私に内緒で、身元を調べて相手に、知れて、此の話がこわれたら、一生恨みますから」と帰ってもらいました。

彼は、突然川口に来た男、そして、健全者、世の中を知って居そうで、知らない私を、皆が、老なつかしく思えたのでしよう。

関根さんの姉妹からの反対ならば、当然の話が私の家の、方からでは、常識から考えると、おかしいのでした。私は、今まで我がままを言ってダダをこねた事は一度も無いのですが、この時ばかりは、泣きながら、

「私が自分で探して好きになつた人、もしも、彼が私を、裏切る事があっても、仕方がない、一ヶ月でも、一週間でも幸福であつたら、それだけで良いその時諦めれば良いのだから、私は、長い間天理教を信じてきた、神様は金と塵とは、一緒にしない相手が塵なら、自分も塵と思えばいい、教えを、信じている

自分を、信じ、相手を信じる。」と
両親に、説得しました。

父も母も判ってくれて、久子の幸せを、許してくれました。
あの時は、皆を恨めしく思ったのですが、

健全者が年上の障害者を嫁に、と言う事が、おかしいと、思ったのでしよう、最近姉が言うのです、父が「久子が、結婚したいと言っているが、

母さんは、心配しているが、一度は、結婚させてやろうと思うけど、もし帰って来ても気持ち良く迎えてやっておくれ」と言ったそうです。

皆は、私を、心配してくれた人達でした

彼でさえ、クリーニング屋の奥さんが、

「チャコさんて、気持ちのいい人よ、お嫁さんに、したら、」と

言った時、「何で足の悪い人と一緒にさせるんだ」と言った事が、あったそうです、父や母も、「久子が見つけた幸福ならば」と

気持ち良く関根さんを、迎えてくれるようになりました。十一月に、

結納を、して、クリーニング屋さんので知り会ったと言う事もあって、御夫婦に、来て頂いて内内で、盃事を済ませて、入籍しました。

昭和四十八年十二月一日、関根宏の妻、久子になったのでした。

結婚式は、弟達の花屋と結婚と、あわただしかった一年で、私達の事は来年春にと、する事にしました。住まいは、私の住みなれた、川口に、してもらいました。

宏、三十六才、私は、二十年前、占いのお婆さんが、言った通りに、

四十二才で良い人と、結婚できたのでした。

和泉さん、長い間、覚えていてくれて、有難う。おばさん。

四十八年は、世界の、オイルショックで、私の仕事も、ぐんと減りました、今までの様に夜遅くまで、仕事をして居られない私には、主人が、働いてくれて、主婦の仕事が、楽しく、幸せの女神様が、私に、沢山、プレゼントして下さったのでした。「二十年も前の占いが現実に、」

第三十七章 「労働大臣賞は、私の、ファイナーレー」

結婚した私には、もう一つ、障害者の会の仕事を、辞めなければなりませんでした。せつかく皆の心配を押し切って、自分の幸福に賭けた私には、家庭が、大切でした、市役所から、頼まれた青年部と、スポーツ部とのブリージ役も私の出番も無いくらいに、和気会い合ひ、となり、私は、自分のやる事は、ここまでと、思ったのでした。

そんな時、私の、引退するのに、合わせる様に、国から、青年婦人部会に、何時も使わせて頂いて居る、

川口勤労者青年ホームで、「このホームを、使用している中で、一番、会が、まとまって、活動しているから、」との理由で、

労働大臣賞を、申請してくれたのでした。

賞そのものは、川口身体障害者青年婦人部会に下さる賞でしたが、会を去る私に、一番うれしい賞でした。

人様が見ても良く、ここまで、まとまったと、褒めて下さる様に、なった事かと、祝賀パーティーは市役所の部長さん、課長さん、係長さん他大勢の方々、始め本会の、役員さん、が参加して下さい、青年婦人部会 全員、感激の祝賀会でした。

最後は参加者全員、スクラムを組んで、大きな声で、歌いました
まるで、私の、ための、ファイナーレーでも、あったのでした。

心の中で、「さようなら、さようなら」と、叫んでいました。

第三十八章 「私も、幸福になりました」

四十九年元旦、夫と、迎えた、新春は、夫は真面目で優しい人です。

私は長い人生を、悪い足と闘いながら、手さぐりで明るく生きようと、皆にささえ、られながら、ここまで、一生懸命、生きてきて、人の幸福を、自分の、よろこびと、時には、くじけて、涙する事も、あったが、

本当に、こんなに幸福になっても、良いものか、夢では、ないかと思うほどでした。

二月十七日、夫、宏と、久子の「結婚披露宴」の日も、決まりました。

会場は、川口婦人会館を選びました。会場を借りるだけです。

お料理は、魚屋の、妹良子の、店から、敷物は、ミニスーパーの、
さんの店から、テーブル花と、私が持つ、プーケのお花も
弟雄司が、
と、……、

全部、姉弟で会場を、素敵なお花は高級ホテルにも、負けない豪華でした、

お料理も、とびきりの内容でお客様も食べきれない程、喜んで下さいました。
家中、又友達、仲人した、鈴木さん、石井さん、も、

会場造りに、一生懸命手伝ってくれました。大村さんは、会館の、
テーブルでは、艶消しだからと、白い布を沢山買って来てくれて、
敷いてくれました。

私のお色直しのピンクの、ロングドレスは、もちろん私が、仕立てました。

母は、「久子も年なんだから、江戸褌を着たほうが、良い」と、言ったのですが、
私は「いくら年だって一生に一度は、花嫁衣裳を、着て見たいし、宏さんだって
始めての結婚だし、絶対に花嫁衣裳を着る」と、

頑張りました。母とのやりとりを、聞いて、夫は、「思う通りにさせて下さい、僕は、かまいません」と、言ってくれたのでした。

私も、どうとう、白の、花嫁衣裳を着せて、もらいました。

大勢の皆様達のお陰で、立派な結婚披露会場が、出来ました。

式は、天理教で神前結婚を挙げてから、披露会場に来ました。

母も、嬉しそうに、江戸褌の上から、白い割烹着を掛けて、走り回るので

した。

親族は、もちろん、市長さん、市役所の部長さん課長さん、障害者の、皆様で、両家合わせて、八十五人の、御出席を頂きました。

それは、皆様の真心で祝ってくれた結婚式でした。

母は、私達のところへ来て、宏さんにお酌をしながら、

「関根さん久子を、よろしくお願いしますね、」と言って、何度も、

頭をさげる母でした。無口な、父も、うれしそうに、私を祝ってくれて、

宏さんに、母と、おなじ様に「久子をよろしくお願いします」と、

親は、足の悪い娘の結婚を、幸福多かれと、祈る思いだったのでしよう。

これで、ひとまず私、久子の、癸病から、結婚までの長い話は、

おわかりますが、現在七十七歳、まだ私に、残された時間が有ったら、

また、書きたいと、思っています、読んでくださって有難う御座いました。

それから三十五年今日まで主人に、助けられながら、今も幸福に暮らしております。父も、母も安心して高い空より、見えて、くれると、思っています、

平成二十一年四月

関根久子